富山県大山町中世城館調査報告書

平成二一年三月

大山町教育委員会

序

このたび「自ら考え、自ら実践する地域づくり」事業として、大山町の歴史文化にかかわるいくつかの事業を企画しましたが、その中の一つとして、中地山城跡調査を中心にした町内の城跡調査を進めてまいりました。

大山町民の現在の生活は、私たちの祖先が長い歴史の中でつくり出し、育ててきた文化の積み重ねの上に成り立っており、これらの文化的遺産を大切に保護、継承、創造、発展させていくことが今に生きる町民の責任であると考えています。このような観点から、大山町における史跡を積極的に整備する必要があると考えたわけであります。またこの調査やその公開を通して、地域の歴史的文化環境が豊かになり、町民一人一人が文化財保護の関心も深まると期待したわけであります。更に町民の郷土理解、そして郷土愛にも直接的に結ばれると考えたからであります。

これらの城跡調査はすべて山城であることから、所在地は山間地にあり、しかも実測図作りが伴うことなので当然調査は季節的に樹木の落葉時や芽の枯れた年末と春先を選ばねばなりませんでした。しかもこの限られた期日の土曜日、日曜日という厳しい中での調査で、多くの温かいご協力ご援助をいただきました。

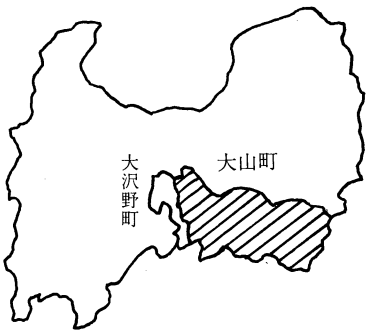
この事業は高岡徹先生をチーフとして前田英雄先生、久々忠義先生など町内外の方々の御協力によって進められました。高岡徹先生からは、樫ノ木城をはじめ各山城の調査は時宜を得たものであるとの評価をいただきました。また、それぞれの調査をもとに史実（史料）との照合や、城郭の実態からその城のはたらき、性格、各城（砦）館などとの関連など新しい見方、考え方など示唆に富んだ報告をいただきました。

この調査にご協力くださいました高岡徹先生をはじめ関係各位に心からの感謝の意を表したいと存じます。

町民の皆さんのお手元に、こんなすばらしい報告書をお届けすることができることを非常にうれしく存じます。

そして、町の歴史にとってすばらしい文献になったこと、この文献をもとに各城の保護や活用など町として今後の大きな課題であることも書き加え、序にかえさせていただきます。

大山町教育委員会　教育長　土肥　菊壽



例　言

一　本書は、富山県上新川郡大山町に所在する中世城館跡の調査報告である。ただし、大山町の歴史的・地理的特性上、隣接する大沢野町域の城館についても、あわせて触れることとした。

二　本調査は、大山町教育委員会が平成元年度に城郭研究者の高岡　徹氏に委託し、実施したものである。

三　本書の執筆・編集及び各図面の作成は高岡　徹氏が担当した。

四　調査期間中、大山町内の小・中学校に勤務する教員の方々、とやま歴史的環境づくり研究会会員の方々、また中地山地区をはじめ地元の方々多数に御協力いただいた。深く感謝して、御礼申し上げる次第である。

目次

序
例言
はじめに …… 1
一　小見城 …… 2
二　樫ノ木城 …… 6
三　津毛（つげ）城 …… 11
四　中尾館 …… 17
五　中地山城 …… 18
六　原砦 …… 29
七　日尾城 …… 31
八　文珠寺城 …… 34
九　湯端城 …… 37
付・大沢野町の中世城館
一　岩木砦 …… 43
二　猿倉城 …… 45
三　栂尾（とがお）城 …… 50
上新川地域の中世城館とその性格 …… 59
おわりに …… 62

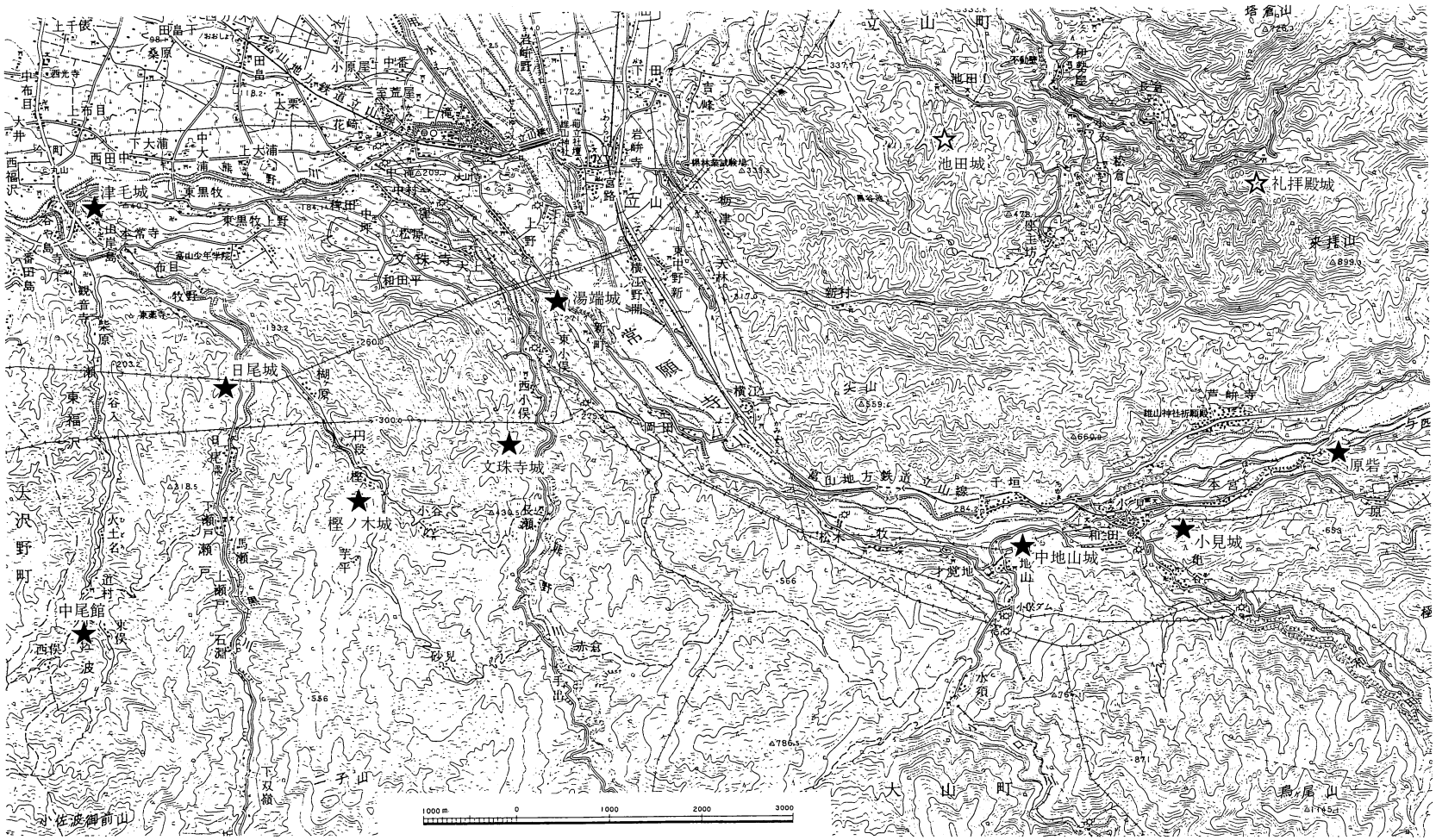


図１　大山町とその周辺の城館

はじめに

富山県の南東部に位置する大山町には、図1に見るように計九カ所の中世城館跡が分布する。これらの城館については、すでに昭和三十九年刊行の『大山町史』の中で、石原与作氏によって中地山城をはじめとする主要な遺構が簡潔に紹介されている。その後、筆者が調査・執筆した『日本城郭大系』第七巻（新人物往来社）が昭和五十五年に刊行され、新たな視点から検討が加えられた。

この内、『大山町史』について言えば、初めて町内に存在する城館を記述した意義は大きいが、掲載された図面が簡単な鳥瞰図を中心としたものであるため、城館の構造（縄張）を知るには不十分であり、遺構の実態を正確に把握することは、困難であった。これに対し、『日本城郭大系』では、各城館の立地状況や築城の背景などを関連する文献史料などから記述し、遺構自体も当時の踏査成果に基づき、詳しく記している。しかし、残念なことに、時間的な制約などから、各城館の縄張図が作成できず、それを掲載できなかったことが悔やまれた。なぜなら、縄張図は城館、特に山城の構造を理解する上で必要不可欠のものであり、また、遺構の評価になくてはならないものだからである。

このたび、大山町では『大山の歴史』の編纂が図られ、その一環として町内最大の山城である中地山城跡の実測図作りが行われた。そして、これに時期を合わせる形で、町内の他の中世城館についての悉皆調査も実施されることになった。この調査事業は、昭和六十三年十二月二十六日の事前打合せ会に基づき、大山町教育委員会の委託を受けた筆者を中心に平成元年度の一年間を費やして行われた。ほぼ十年前、現地を踏査している筆者の経験からすれば、樫ノ木城跡のように今ではまったく人も訪れていない所もあるなど、全般的に山が荒れ、城館跡に関する伝承も失われつつある困難な状況下での作業となった。

今後も、山間部の村落では過疎化が着実に進行するとみられ、当地域における調査は、日を追って困難なものになることが予想される。その意味で、このたびの調査はまことに時宜を得たものと言わねばならない。特に今回は、遺構を残す城館については、必ず縄張図を作成・掲載するよう努めた。これは一種の概念図であるが、実測によって要所を押さえてあり、かなり忠実に遺構の実態を示しているはずである。本調査による成果が、大山町の中世史像を明らかにする、一つの手がかりとして活用されるなら、望外の幸せである。

なお、『大山町史』によると、本書に紹介する城館以外に一ノ瀬城やハッチャクボ城の名をあげているが、その所在地など詳細は不明であり、本書には掲載し得なかった。この点をあらかじめ断わっておきたい。

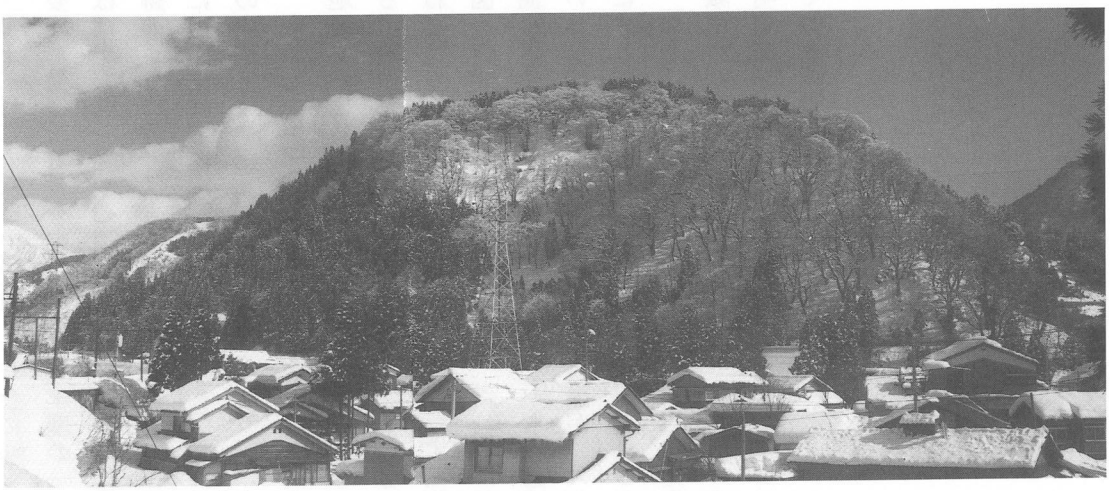
一　小見城

標高　五一〇m
比高　二〇〇m

小見城は北を常願寺川、西から南を和田川によってはさまれた論田山の山上に築かれている。西麓には小見、南麓には戦国末期の銀山発見で、越中七金山の一つとして栄えた亀谷の集落がある。論田山の山上は、北・西・南の三方を急斜面で囲まれ、東方だけが尾根続きの要害である。山上からは西方の中地山城方面を良く望むことができ、両城の緊密な関係がうかがえる。

この城の縄張は図2のようになっており、削平した郭の跡が数多く見出される。まず、東端のA郭であるが、ここは城の中心部から尾根続きをたどった奥の山上にあたり、二〇×一二m（東西×南北。以下、同じ）の広さの平坦地がある。郭の北側は急斜面だが、西側はだらだらと下る斜面となる。これに対し、東側には二カ所の堀切（No.1及び2）が段差を伴って設けられ、ここから南東方向に続く尾根伝いからの攻撃を防いでいる。この内、東端の堀切（No.1）は東側に対し鋭く切り立てられ、敵を寄せつけない急峻さをみせている。城の城域もここで画される。A郭は位置からみて、東方に備えた出丸の役割を果たしていたと思われる。

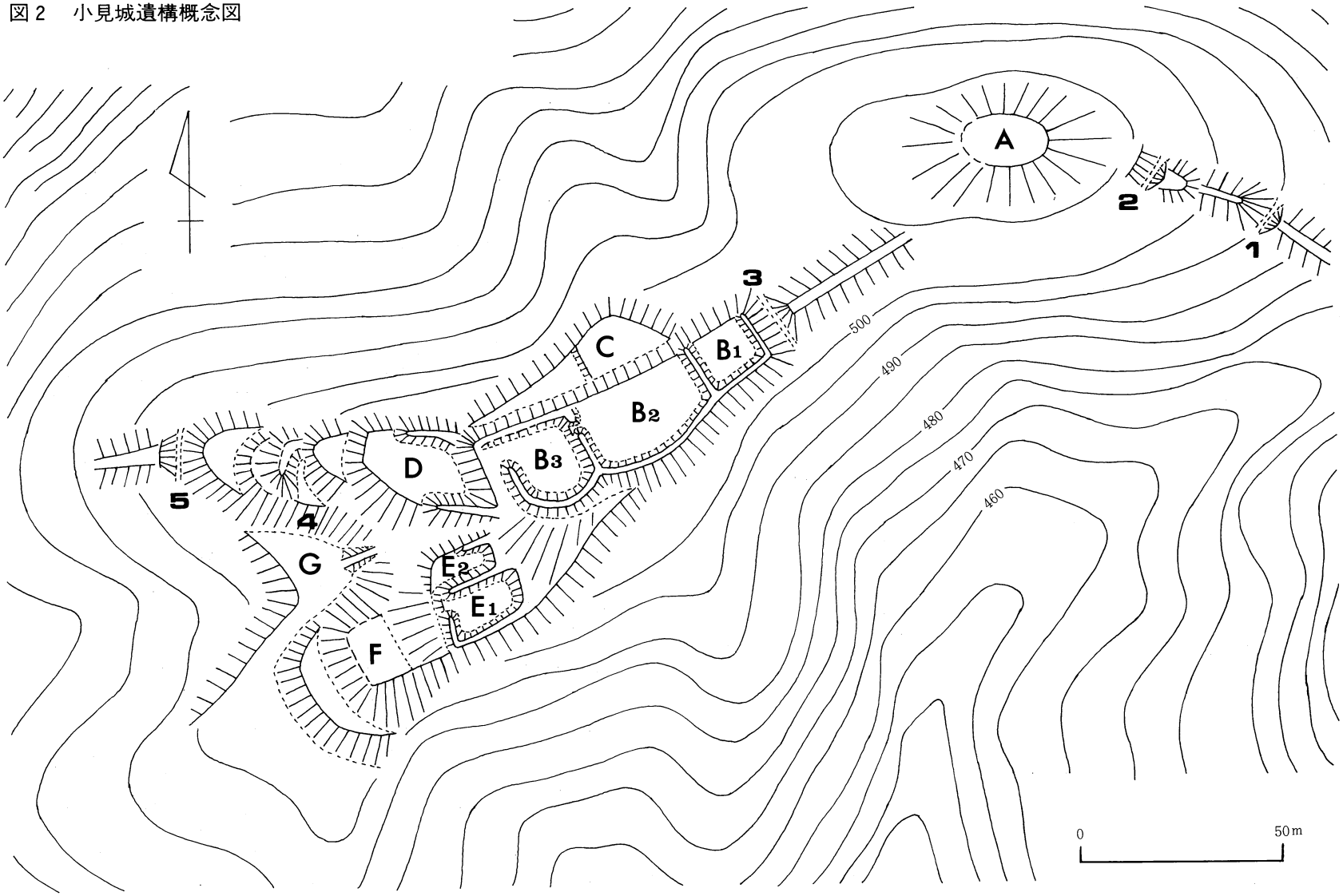
次にA郭から尾根伝いを南西にたどると、堀切（No.3）がある。この堀切は上幅が一〇m、深さ二・八mを測り、東方の尾根伝いと城の中心部を明白に画するものである。堀切から南西方向には、広い平坦面がほぼ同じレベルで続くが、中は低い土塁状の高まりによって三つの区画に仕切られている。便宜上、本書では東側からB1、B2、B3郭と呼ぶことにする。



小見の集落から見た城跡

各郭を仕切る低い土塁は、堀切（No.3）の西側から前記三郭の南側のへりに沿って伸び、最後はB3郭の西側にまわり込んで終わる。また、B3郭の北側にも低い土塁の痕跡がある。これらの土塁は、高い所でも一・二m（B2郭南側）から〇・九m（堀切No.3西側）にすぎず、もともと小規模なものである。B1～B3の三郭は、ほとんど一つの郭として一体化しているが、前述の低い土塁によって仕切られているのは、何らかの機能分担が行われたこ

図２　小見城遺構概念図



堀切（No.３）を南側より見る

とを示すのであろうか。いずれにせよ、B1～B3郭はその位置と広さからみて、城の主体部とみてよく、中でも、中央にあって面積的にも大きいB2郭が主郭にあたるのであろう。広さは、B1郭で一五×一三m、B2郭で三二×二〇m、B3郭で一七×二一mである。なお、B2郭とB3郭の西側で土塁が切れており、それぞれ出入口があったと推測される。

B2及びB3郭の北側約三m下には広い平坦地があり、主体部を守る腰郭（C郭）を形成する。この郭は、山の北側斜面を削って設けられたものである。一方、B3郭から西へは尾根が二本に分かれ、それぞれ数段にわたって尾根を掘り込んだり、削ったりして郭を連ねている。この内、北側の尾根筋を見ていくと、B3郭の一段下を深く掘り込む形でD郭が設けてある。広さは二二・五×一〇・五mで、南側と北側を掘り残す形で土塁としている。ここは風も当たりにくく、居住施設などを設けるにも適していたであろう。D郭の先には小平地を一段おいて堀切（No.４）があり、その北側が掘り残されて土橋（幅二m）のようになっている。ここから、七～八m先に平坦地が一段設けられ、さらにその下に大きな段差を伴う堀切（No.５）がある。この堀切の上幅は一一mに達するものであり、城域もここで画される。

これに対し、南側の尾根筋には、D郭よりも浅く掘り込んだ形で、方形の区画が二カ所認められる（E1及びE2郭）。いずれも周囲を低い土塁で囲まれ、南北に並んでいる。広さはE1郭で一六×一二m、E2郭で一四×五・五m程度である。E1郭の西側には、土塁が切れて出入口とみられる開口部がある。ここからさらに斜面を下った所に九・六×一四・五mの方形の平坦地（F郭）があり、その一段下に幅六m、長さ三八mにわたる細長い帯状の平坦地がめぐる。この西側は切り立てた急斜面となって、尾根伝いからの攻撃を阻んでいる。なお、これら二本の尾根筋の中間には一三・五×二二mの三角形の平坦地（G郭）もある。

以上、見てきたように、城内の郭は大小七カ所、また堀切は五カ所に及び、その他にもいくつかの人工的な平坦地が付随する。こうした縄張は、西の中地山城とは異質なものであり、もともとは中地山の築城以前に築かれた古い時期の山城とも考えられる。そのことは、郭の遺構がどちらかと言えばあまり明確ではなく、痕跡をたどりにくいことからもうかがえる。しかし、戦国末期に中地山城が江馬氏によって拠点化された際、この城跡がそのまま放置されていたとは考え難く、万一の際の詰城などとして利用されたとみるべきであろう。

山頂部のＢ郭

Ｃ郭を東側より見る

二　樫ノ木城

標高　三四〇m
比高　一六〇m

樫ノ木は、津毛城のある東福沢から栃ケ原川を東南に約四・五kmさかのぼった山間の小集落である。城はこの集落を見下ろす南側の山上に築かれている。城の西側は深い谷で、東側から北側を栃ケ原川がめぐる。このため、山続きは南方の尾根伝いだけとなっている。

集落の南端より登ると、山の北側中腹の広大な平坦地に出る（以下、図3参照）。ここは、昭和五十四年の調査時にはまだ村人の畑が作られていたが、今では耕す人もなく、ススキなどが茂り、荒れ果てている。この平坦地は直接防御施設で守られていないものの、城郭に隣接することから、関連施設の置かれていた外郭部にあたるとみられる。石原与作氏の見取図（『大山町史』所収）によると、この一角に「厩（うまや）」の記載がある。山の中腹にこのような広い平坦地を有することが、樫ノ木城の一つの特徴であり、単なる軍事上の要害とは見なし難い。

樫ノ木城跡遠望

さて、主郭は山頂部の平坦地（A郭）で、三〇・三×二四・五m程度の広さがある。この西側には、高さ一・六mの土塁が設けられている。主郭上から北方の眺望はよく、遠く呉羽丘陵や富山市街を望める。主郭の南方は尾根続きとなっており、一段下に六・八×七mの小平坦地、さらにその先に堀切が設けてある。この堀切は、南側で深さ二・四mを測り、そこから先は細い尾根となっている。

A郭の北東を下ると、中腹に一八×七・三mの平坦地（B郭）が作られている。ここは石原氏の見取図に「蔵跡」と記されている箇所とみられる。一種の腰郭であろう。城の構えは、図3からもわかるように、明らかに北方（樫ノ木集落側）を正面として意識したものであり、主要な郭もすべてこの方面に集中する。これらの郭群は斜面を大がかりに削って設けてあり、北側はいずれも急峻に切り立てている。下から登ると、まさに階段状に郭が連なった印象を与える。しかも、各郭の塁線は直線的に揃えられており、極めて計画性に富んだ縄張を見せている。こうした計画性は、中地山城にも見られないものであり、両城の築城者が異なることを物語る。いずれにせよ、戦国期にこの城がかなり大きな支配拠点として築かれたことは、明白である。

A郭からまず北西に下ると、一四×一八mのC郭がある。郭の西端には、下へおりるための出入口があり、一・三mの深さで掘りくぼめられている。ここから急な斜面を下ると、三三×二二mのD郭がある。郭の南側は、一m程高くなった一画で、谷に臨んだへり

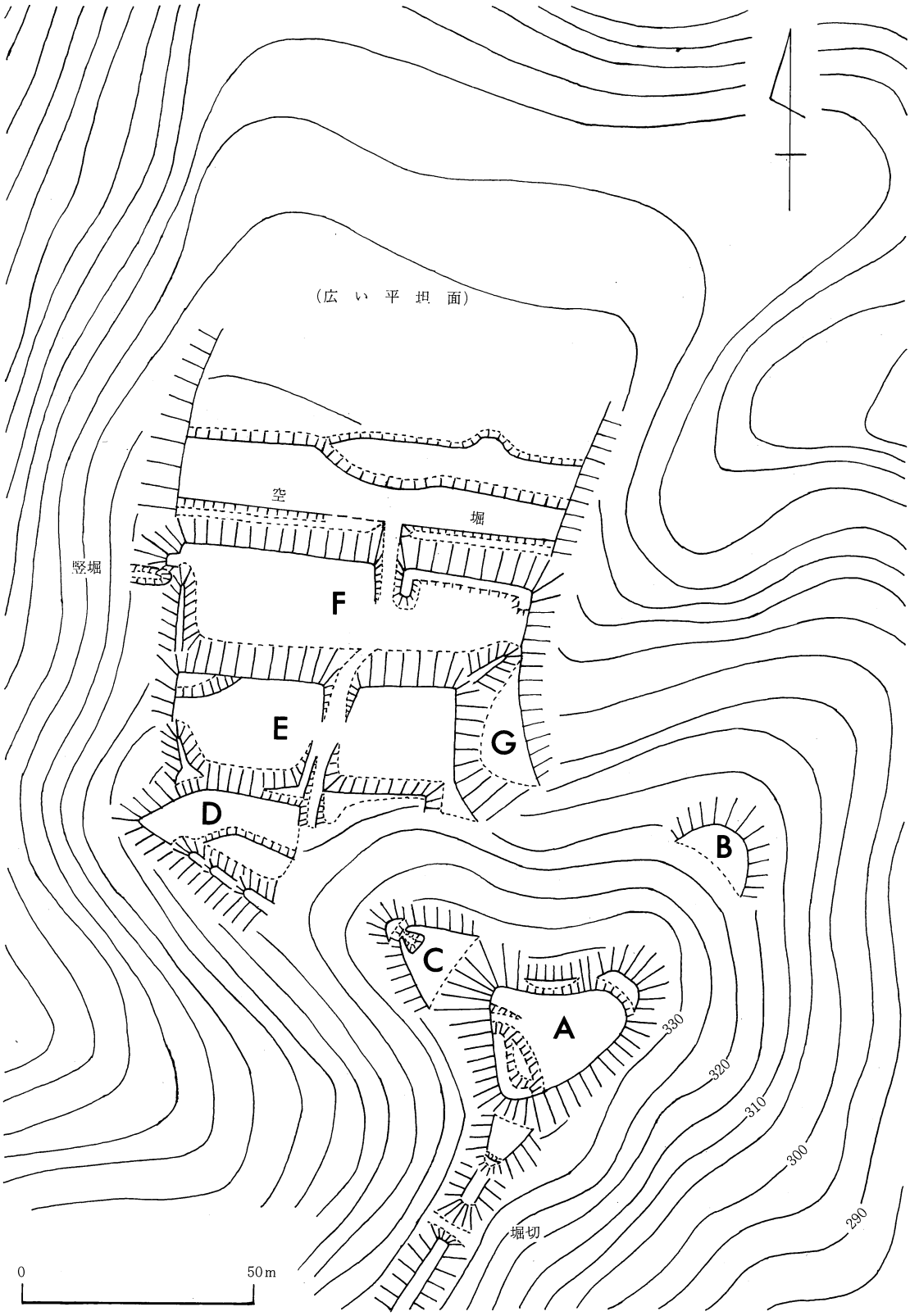


図3　樫ノ木城遺構概念図

に二～四mの高さの土塁が設けられている。D郭の東側の付け根から坂道を下ると、E郭に出る。ここは五〇×二〇mの広さである。西側のへりには土塁があり、また東側一段下には、一六・七×二七・五mの広い腰郭（G郭）が設けてある。

E郭の北側中央には下へおりる坂道があり、この下に六五×二二mのF郭がある。ここにも西側のへりに土塁が設けてあり、外側の斜面には上幅三・五m、長さ八・五mの竪堀が掘られている。郭の北東部には低い高まりが続いているが、これは土塁の痕跡とも思われる。郭の北側をおりると、下に上幅三～五・五mの空堀が東西に伸びている。これは切り立てられた塁壁とあわせて、効果的な防御となっている。ここから前述の畑跡の広い平坦面にかけて数段の低い段が続いているが、多くは後世の耕作その他によるものとみられ、縄張図には示していない。

次にこの城について記した史料を掲げる。

○一、棚（棚）ケ原村樫ノ木要害ハ謙信越中新川郡ヲ随、村田大炊介ヲ指登セ、飛州之押トシテ此所ニ在城ス（「越州新川郡郷庄古城」）

○一、壱ケ所　古城跡

但棚（棚）ケ原村領山之内、村田之城与申伝候、但城主相知レ不申候（「宝暦十四年新川郡古城跡名所旧跡等書上申帳」）

なお、加賀藩の富田景周著『越登賀三州志』（以下、『三州志』と呼ぶ）故墟考では、津毛城を「一作樫木。又謂之村田城」とするが、明らかに両者は別の城であり、誤りである。また、「富山領等越中国古城併雑書記」によると、福沢村の「附之城」（津毛城）は、戸川（栂尾）城主塩屋筑前守がこの樫ノ木城を攻めた際に「出城」として築いたものだという。この他、『肯搆泉達録』には、城主として村田与十郎の名をあげている。

村田氏は上杉謙信の部将であり、天正元年（一五七三）十月十九日に太田上郷を料所として申し付けられている。おそらく、村田氏の在城もこの頃からとみられる。

今度改而、太田之上郷吾分ニ為料所申付候、縦如何様ニ前々無沙汰申候百姓等有之共、此度者令宥赦召返、如前々用所等申付、可相立人家候也、仍如件、

天正元年　　（上杉）謙信

十月十九日

村田忠右衛門（秀頼）尉殿(1)

実は、同日付で上杉部将河田長親も謙信より太田下郷を料所として申し付けられている。太田保は富山南方の要地であることから、これら両将は平野部にある今泉・太田本郷などの城とは別に、太田保一帯を見下ろす南部の津毛城や樫ノ木城を拠点化したのであろう。それでは、上杉部将村田氏などによる樫ノ木城の維持は、いつ頃まで続いたのであろうか。史料的にははっきりしないが、遅くとも神保長住や斎藤新五郎などの織田勢が越中へ進出した天正六年（一五七八）までであろう。樫ノ木城のその後については明らかでない。

ところで、樫ノ木城の創築は前述の天正元年を多少さかのぼると推測される。ここで、次の史料を見てみよう。

追啓、永々順国御辛身察入候、此両種令進覧候、万般憑入存候、近日帰府之刻可申承候、景虎景勝無異儀候之条、可御心安候、貴殿留守之儀気遣有間敷候、折々喜平次申付候而、万般用心等厳敷家頼之もの共ニ申付候、御気遣有間敷候者也、

其元様子無心託候ニ付、河田豊前差遣候、先日被申越良頼事、弥無違乱居城を明渡、新庄可相移之旨可被相達候、良頼証人、塩屋筑前守・馬場才右衛門尉其上無別心之通、罰文調指越候、於左候者、為替之地五ヶ所出置候、急与可引渡候之事

一、明春有無上洛之心入候条、於越中表貴殿見分次第、出城等可被相計候、

一、樫木出城之儀、良頼為軍役可相守之旨、可被申含候、越中過半可属謙信之方、以罰文申越之間、猶以東郡江被出張様子被見届、二着ヶ間敷者共於有之者、即時可被追出、雖然者家頼之者共并妻子等証文於相渡者、可任其意候、越前表之様子、上洛之節、路次筋明細見分尤ニ候、義景別心有間敷貴殿迄も、先年より預示候、雖然能々可取繕事肝要候、

（中略）

八月十日　（上杉）輝虎（花押）

村上源五殿

御宿所(2)

主郭の南側に設けられた堀切

F郭の北側下に設けられた空堀

この上杉輝虎(謙信)書状は、『富山県史』史料編によると、元亀元年（一五七〇）のものとされている。書状中に「樫木出城」とあるのが、大山町の樫ノ木城をさすことは言うまでもない。書状によれば、飛騨の三木良頼が越中国内において上杉氏に属し、その軍事行動の一端を担っていることがうかがわれる。

特に、「違乱なく居城を明け渡し、新庄へ相移るべきの旨、相達せらるべく候」とあって、良頼が新庄城（現富山市新庄）の守備につくよう謙信から指示が発せられていること、また樫ノ木城についても、「軍役」として守らせるよう述べられているのが注目される。このことから、樫ノ木城がすでに元亀年間には存在し、飛騨の三木氏がその守りに関わっていたことが知られるのである。しかし、樫ノ木城の創築は、あるいは永禄年間にまでさかのぼるかもしれない。東方の中地山城が江馬氏によって築かれたのが、永禄七年（一五六四）頃とみられることから、三木氏の越中進出も永禄年間にさかのぼると推測できるからである。いずれにせよ、元亀元年頃の時点で、樫ノ木城が越中南部にあって、飛騨との往来の上で重要な城郭として認識されていたことは、間違いなさそうである。三木氏による樫ノ木城の維持は、しかし遅くとも天正元年頃には終止符が打たれたとみられる。前述のように、上杉部将村田氏がこの城に入り、拠点化したと推測できるからである。村田氏が樫ノ木城に配置された理由として、前掲の「越州新川郡郷庄古城」が「飛州之押トシテ」と伝えているのは、この城が上杉氏にとって飛騨口の要（かなめ）になる城郭であったことを如実に物語っている。

註

(1)『富山県史』史料編Ⅱ中世（以下、『県史中』と記す）一八二六号文書

(2)同右、一七二四号文書

三　津毛城

標高　一二〇m
比高　四〇m

津毛城は熊野川の左岸に横たわる台地の西端部に築かれた城である。この台地は北側を熊野川、南側を支流の黒川によってはさまれた要害の地を占める。地元では「津毛山」と呼んでいる。

昭和三十五年の調査による石原与作氏の見取図（『大山町史』所収）によると、城は台地西端部の西・東・南の三面を土塁で囲み、東側と西側の土塁の外側に空堀をめぐらしたものであった。北側は熊野川に臨む急崖であったため、土塁は築かれなかったらしい。東西の土塁に囲まれた郭内は、二二〇×二〇〇m程度の規模であり、南麓の東福沢から登る道（石原氏は大手道とする）が東側土塁の中ほどに設けられた出入口（虎口）を抜けて郭内に通じていた。見取図によると、東側の土塁はこの出入口付近で喰違いになり、「コ」形の屈曲を見せている。これは虎口を守るための防御上の配慮であろう。この他にも、台地の西端で南側へおりる七曲りの急な坂道があったといわれる。

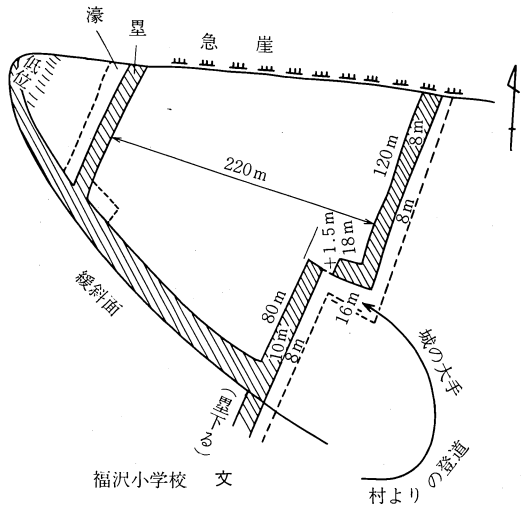


図4　津毛城跡見取図（『大山町史』93頁より）

残念ながら、城跡一帯の台地は、過去の土砂採取によって遺構が消滅しており、今ではこうしたプランを確認することができない。ただ、昭和三十六年に撮影された航空写真によれば、前述の「コ」形の屈曲を示す東側土塁のアウトラインらしきものを認めることが可能である。過去の見取図や航空写真などから判断して、津毛城は内部に広い平坦面を有していたことが知られ、単なる要害ではなく、居住性に富んだ地域支配の拠点としての性格を持っていたと見られる。

『三州志』故墟考は津毛城について、「一作樫木。又謂之村田城。」とし、別名を「樫木」などと記しているが、樫ノ木はここから東南に約四・五kmを隔てた城跡であり、明らかに津毛城とは別のものである。江戸時代の書上申帳などによれば、津毛城の別名は「黒牧村古塁」・「黒牧村古城」・「黒牧古城」・「黒牧村領之内つきの城」・「桃ツケノ城」・「附之城」などと記されている。この内、「ツケノ城」や「附之城」の呼称こそ、津毛城の本来の城名であったと思われる。一般に「付城」とは、敵の城を攻めるために、その近くに築く攻撃用の城のことをいうが、この城の場合、それがそのまま城名として呼び慣らわされるようになったのであろう。「富山領等越中国古城併雑書記」には「福沢村定附之城」として、この城は戸川の城主筑前守が樫木村の城を攻めた際、出城として築いたものだと記されている。この伝承を信ずるなら、津毛城は初め戸川（栂尾＝現大沢野町）の城主塩屋筑前守が樫ノ木城を攻めるための付城だったとみられる。

土砂採取で消滅しつつある津毛城跡（手前は熊野川）

さて、江戸時代の書上申帳などでは、この城の城主として南北朝期の桃井播磨守（直常）と戦国期の上杉部将村田修理の名をあげている。桃井直常は南北朝期に越中の守護をつとめ、たびたび幕府方に敵対して越中国内で戦いを繰り広げた武将である。その足跡は応安四年（一三七一）を最後として史料上から消えているが、直常の拠点としたのは、新川郡太田保であったとみられている(1)。特に布市は直常の居城があったと伝えられるなど、とりわけ関わりが深い。この津毛城が布市を含め、太田保一帯を見下ろせる位置にあることを考えるなら、南北朝期に桃井氏が万一の際の要害として利用してもおかしくはない。津毛城跡近くの牧野の東薬寺に直常の墓と称される五輪塔のあることも、そのことを裏付けそうである。これらの点を総合すると、津毛城の創築は南北朝期（十四世紀）の桃井直常時代にさかのぼるかもしれない。そして、戦国期には、その跡が再び飛騨勢や上杉氏によって城地に選ばれたのであろう。

ところで、『三州志』故墟考は、村伝えとして白屋（塩）秋貞が居城したことを記している。塩屋秋貞は飛騨の三木良頼の部将であり、元亀二年（一五七一）には猿倉城や栂尾城を拠点化していたことが知られる。その秋貞の居城と伝えるのは、前述の「富山領等越中国古城併雑書記」が、「附之城」を塩屋氏による樫ノ木城攻めの際の出城としているところからきたものであろう。伝承の真偽はともかく、猿倉や樫ノ木、さらには中地山にかけて、飛騨武将にちなむ伝承等が広く残ることから、この津毛城も一時的に飛騨勢の拠点となっていたことが、十分考えられる。時期的には永禄から元亀年間にかけてであろう。

飛騨勢のあとを受けて津毛城に入ったのは、上杉氏の部将村田修理である。上杉氏は元亀四年の時点でほぼ神通川以東の越中東半部を制圧しており、天正元年（一五七三）十月には「樫ノ木城」の項でも述べたように、村田忠右衛門尉（秀頼）に対し、太田上郷が料所として申し付けられている。『三州志』や江戸時代の書上申帳によると、この地域の城郭に関連して、村田縫殿助・同修理亮・同與十郎・同大炊介らの名があげられ、『三州志』では縫殿助を「一作修理亮又作與十郎」とする。おそらく同一人物であろうが、この村田氏は津毛城の他、樫ノ木城、栂尾城、猿倉城、岩木砦などにも伝承を残している。こうした点からみて、村田氏は上杉氏支配下の越中にあって、特に富山南方の飛騨口の守りを担当した部将であったと考えられる。村田氏などの上杉部将が津毛城を守った期間は、おそらく天正元年頃から同六年にかけての間であろう。

天正六年（一五七八）は、越中の戦国史の上でも大きな画期となる年であった。すなわち、越中から能登・加賀にかけての一帯を制圧していた上杉謙信が急死し、これによって生じた動揺に乗じて、織田方が越中へ進出したからである。そして、これを契機に、越中国人層の上杉方からの離脱が始まり、上杉方は次第に東部へ圧迫されていくのである。さて、織田勢の越中進攻は飛騨を経由して行われたが、その先陣は越中にゆかりの深い神保長住であった。長住は同年五月、上熊野城主の二宮左衛門大夫に知行安堵状を与え、味方に誘ったり、八月には小谷六右衛門に大道村を与えるなど、次第に飛騨口で勢力を固めていったが、なかなか北方（富山方面）へは進出できなかった。

そこで、織田信長は長住の援軍として斎藤新五郎を越中へ派遣する。『信長公記』は次のように記している。

> 九月廿四日、斎藤新五越中へ仰付けられ出陣。国中太田保の内つけの城、御敵椎名小四郎・河田豊前人数入置き候。尾・濃両国の御人数打向ふの由承り及び、聞落に退散致し、則、つけの城へ神保越中人数入置き、斎藤新五、三里程打出し陣取り候て在々所々へ相働く。

これによると、斎藤新五郎は九月二十四日、越中へ出陣したが、上杉勢は尾張・美濃からの織田勢来援を聞き、拠点としていた「つけの城」（津毛城）を捨てて撤退したという。この時、津毛城を守っていたのは、椎名小四郎（長尾景直）と河田長親であったが、上杉方のこうした布陣は、津毛城がまさに織田方の富山方面進出を食い止めるための前線拠点となっていたことを示している。

しかし、実際は『信長公記』の記事にもあるように、上杉方は織田軍来援の報を聞き、戦うことなく、城を捨てて退去したのであった。こうして織田方は津毛城を手に入れ、城には神保長住の軍勢が入った。このあと、斎藤新五郎は北方の太田本郷に陣し、上杉方の次の拠点となった今泉城（現富山市）を攻める。そして、引き続き行われた月岡野の合戦で上杉勢を破り、これによって織田方の軍事的優位を内外に示すのである。再び、『信長公記』によって戦いの経過を見てみよう。

> 寅十月四日、斎藤新五、越中国中太田保の内本郷に陣取り、御敵河田豊前守・椎名小四郎、今和泉に楯籠候。彼城下迄放火候て、未明より罷退かるゝの処に、人数を付け候。斎藤新五節所へ引かけ、月岡野と云ふ所にて人数立合ひ、既に一戦に及び追崩し、頸かず参百六十討とり、此競を休めず懸けまはり、所々人質執固、神保越中所へ相渡し帰陣候なり。

ところで、この時、斎藤新五郎らの織田勢が飛騨から入ったルートは、長棟または薄波から檜峠を越えて黒川谷へ出る道筋であったとみられる。津毛城はどちらかと言えば、熊野川を隔てた北方（太田保側）に向けて築かれた城であり、南方（飛騨方面）に対してはやや守りが弱かった。このため、天正六年、織田軍が南方から大挙して進攻して来た際には、支え切れずとみて、城が放棄されたの

であろう。ともかく、同年九月の織田軍進攻後、織田方が富山城付近を確保するまでのしばらくの間は、津毛城も織田方の拠点として守られていたとみられる。

なお、江戸時代の史料は津毛城について次のように記している。

○津毛　一作樫木。又謂之村田城。在大田庄黒牧村領。富山本に、自富城巽四里強、黒牧村の巽谷へ入ること一里六・七町、胡桃邑辺と云ふ也。但し当時は採柴山と成りて、遺跡の地不分と云ふ。

邑伝に、白屋秋貞居たりと。歳月不詳。其の後元亀二年一作三年。三月二日、謙信の幕下村田縫殿助一作修理亮又作與十郎。其の家老安達清蔵等二十七臣をして之を守らしむと。或は云ふ、永禄中に村田與十郎此の城に拠りて、上熊野の二宮氏と相闘ひて日夜止めずと也。天正六年より椎名小四郎之を守り、景勝相援けて縫殿助を置けり。同年十月信長公斎藤新五をして攻取らしめ、神保越中守之を守る。因りて椎名は松倉城に入ると云ふ。（後略）（『三州志』故墟考）

○一、黒牧村古城者、先年桃井播摩（磨）守様御居城之由申伝候、年号等之儀相知不申、且右場所当時畠并柴山ニ相成居申候（「文化十三年古城跡併館跡由来所伝之趣書上申帳」）

○一、黒牧村領之内ニ城跡御座候、村田修理居住之由申伝候、只今者柴山ニ成居申候（「宝暦十四年新川郡古城跡名所旧蹟等書上申帳」）

○一、黒牧村領之内城跡有之、今は柴山ニ相成候由、但津毛之城共相唱則図面ニ相記申候（「文化七年新川郡古城跡并館跡御付札之ヶ所詮議之趣脇書仕上ヶ申帳」）

○一、黒牧村古墨
今ハ柴山也、村田修理居住之由（「越中古城記」）

○一、黒牧古城　黒牧村領、西大手先ニ而奥広なる場所ニ而山城ニ御座候、西拾間程、東百弐拾壱間程、北弐百拾壱間程、南弐百拾壱間程、一ノ堀幅四間程、東西長三拾四間程、二ノ堀幅五間程、西北長六拾六間程、三ノ堀幅四間程、西北長百弐拾弐間程、本丸東百弐拾壱間程、西百弐拾弐間程、南北六拾弐間程、池壱ツ之有、指渡七尺斗、深三尺斗御座候、右北之方ニ東西長三拾八間程、南北弐拾間程一囲御座候、右場所ニ而鉄炮玉抔堀出し申事茂御座候、先年ハ桃井播磨守殿御居城之由申伝候、年号之儀相知不申候、且桃ツケノ城与唱申候、右場所、当時畠・柴山ニ相成居申候（「文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳」）

これらの内、城の構造・規模を最も精細に記しているのは、末尾に掲げた文政元年（一八一八）の書上申帳である。同書上申帳によれば、西が「大手先」とあり、このことからすれば、前述の七曲りの登り道が大手道だったのかもしれない。全体の規模は、ほぼ石原氏の見取図に一致するが、空堀として「一ノ堀」・「二ノ堀」・「三

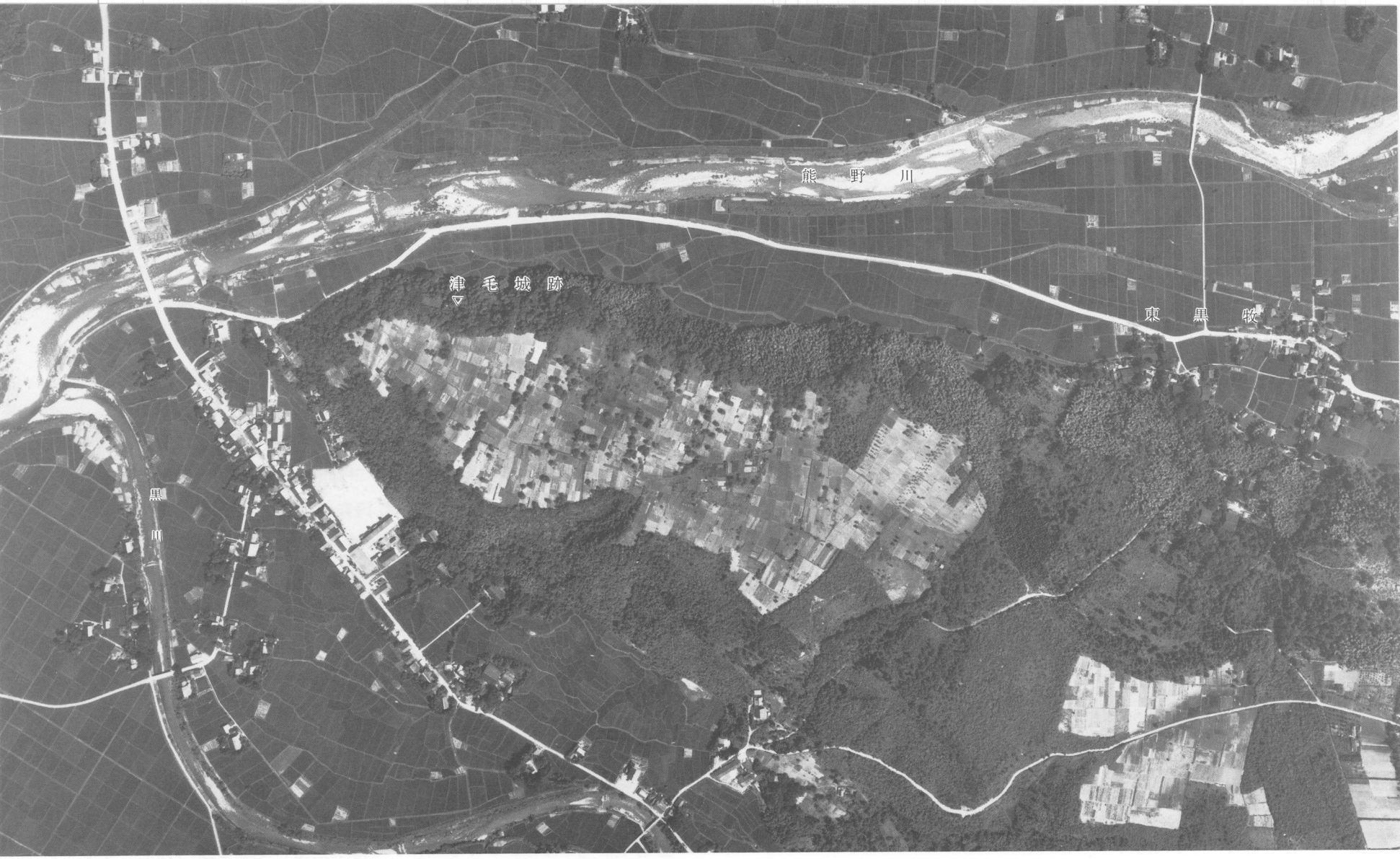
ノ堀」の三本があげられており、石原氏の記した二本の空堀以外にもう一本、別の箇所に空堀が設けられていたことになる。また、指渡し約七尺、深さ約三尺の「池」とは、城内に設けられた水の便であろうか。この北方には東西三十八間程、南北二十間程の別の「一囲」があるという。おそらく、土塁などで囲まれた施設の跡であろう。この場所では「鉄炮玉」（銃弾）なども出土したという。このことは、津毛城が戦国末期に使われたことを十分に裏付けるものである。

なお、「富山領等越中国古城併雑書記」には、上杉謙信が「附之城」において新川郡の庄屋百姓を引見すると称して、一人づつ奥の間へ呼び、首をはねたという話を伝えている。

それはともかく、津毛城は広い台地を利用した大規模な城郭であったとみられる。この地は古くから要衝として注目されたが、それは黒川谷のルートをたどる道筋の存在が大きかったであろう。越中・飛騨間のルートを押さえ、太田保の平野部と山間部の接点に位置するこの城は、交通上のみならず、政治・経済・軍事の面でも大きな位置を占めたとみられる。

註

(1)久保尚文「桃井直常の没落をめぐる諸問題―足利義詮親政期の越中守護支配―」（『北陸史学』第三六号）



津毛城跡付近の航空写真（昭和36年撮影）

四　中尾館

標高　二九〇m
比高　八〇m

小佐波の集落南側に続く山の中腹が館跡であるという。ここは西側を小佐波川、東側をその支流によってはさまれた所で、館跡の北側で両方の川が合流する。この館跡については、江戸時代の書上申帳や『三州志』などにも記載がない。『大山町史』によると、「中尾山には、中尾五郎左衛門という武士がいたという。その館跡には大井戸、小井戸という井戸が現存している」とある。本書では、便宜上、「中尾館」と呼ぶことにする。

伝承地は山の中腹で、北側に向けてゆるやかに下る傾斜面である。ここには「大井戸」、「小井戸」と呼ばれる池があるが、この内、「大井戸」の方は三・三×四・七m程度の大きさで、金の茶釜が埋まっていると伝える。ただし、付近には土塁や堀などの遺構が認められない。また、南方の山続きの山頂一帯にも関連する遺構は見られない。

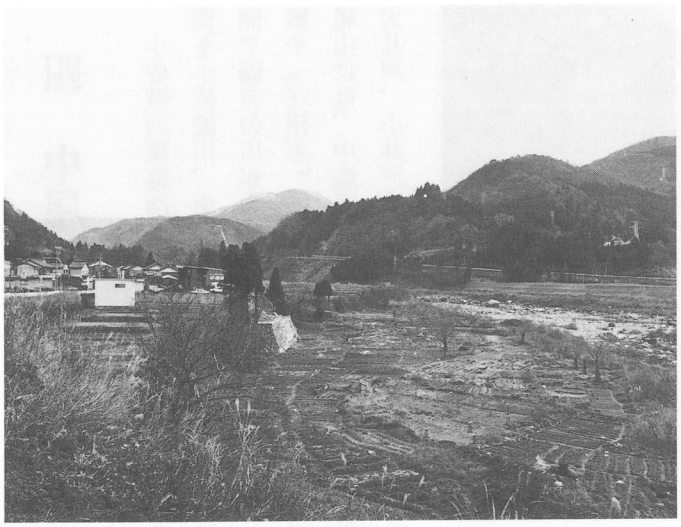
大井戸

小井戸

五　中地山城

標高　三八〇m
比高　五五m

中地山城は、北を常願寺川、西を小口川、また東方を和田川によってはさまれた台地上に築かれた城である。最高所の標高は三八〇mで、台地の西麓には中地山の集落がある。集落からの比高は五五m程度にすぎず、城が存在した当時は、城下集落としての性格を持っていたと考えられる。周辺の城郭として、東方一・八kmに和田川をはさみ小見城、そこからさらに東方一・八kmに、牛ケ首谷川をはさみ原砦がある。これらの城砦は、後述するように中地山城の詰城（小見）や出城（原）として機能したものであろう。


中地山城跡遠望（中央、手前は常願寺川）

また、北東二・五kmには常願寺川をはさみ芦峅寺の集落があるが、この地は古くより立山信仰と関わりが深く、立山参詣のための多くの人々を集めてきた。芦峅寺には立山信仰の衆徒組織も存在したが、それは時として僧兵的存在、すなわち一種の軍事的勢力とみなされ、中世の越中武将達にとって見過ごすことのできぬ存在となった。もう一つ、忘れてはならない点として、交通路がある。すなわち、中世に芦峅寺から立山を越えて信濃へ抜ける山道があり、当時は商人などの往来があった(1)。このように、宗教的・軍事的に要地であった芦峅寺を室町～戦国期に支配したのは神保氏である。神保氏は射水・婦負両郡の守護代として、越中の中央部に大きな勢力を有したが、さらに進んでこの立山山麓の芦峅寺地域をも支配下に置いていた。その理由は、先に述べたこの地域の特性によるところが大きいが、現地の支配には文明年間（一四六九～八七）より重臣の寺嶋氏が関わっていることを確認できる(2)。この寺嶋氏が拠点としたのは、芦峅寺北方の池田城であり、そこから来拝山を経て芦峅寺に至る道筋を掌握することによって、この地域を支配したのであった。このように、いろんな意味で重要な位置を占める芦峅寺が常願寺川の対岸に存在することは、中地山城などの築城を考える上で見逃せないところである。

さて、城は誰によって、いつ築かれたのであろうか。『三州志』故墟考によれば、天正元年（一五七三）、飛騨の江馬輝盛が越中新川郡七万石を領して中地山に築城し、部将の川上中務・和仁某・神代某を守将として置いたという。そして、のちに飛騨の三木氏や広瀬氏が中地山城を攻めると、川上氏らは城を捨てて去り、その後上杉謙信がこの城を攻め取ったと記す。

ここに見える江馬氏は、飛騨高原郷に勢力を有した国人で、その本拠は現在の吉城郡神岡町にある諏訪城であった。江馬氏は永禄七

年（一五六四）輝盛方と時盛方に分裂し、輝盛は国内の三木良頼や越後上杉氏と結んで、武田氏と結ぶ時盛を攻めた。この時、謙信は越中衆に輝盛を助けさせ、自らは軍を率いて信濃川中島に出兵し、武田方を牽制した。このため、時盛は敗れて降伏し、以後、輝盛が江馬家の実権を握る。次に掲げる史料は、この間の事情を物語るものである。

○史料A　上杉輝虎書状

切書披見祝着候、今度時盛(江馬)再乱、無是非次第候、然不違先忠、輝盛相談、至于越中境、被取除儀、誠忠切不浅候、因茲高原へ調儀(儀)之義、姉小路良頼与(三木)輝盛同意ニ預留候間、則越中衆申付、為及手合候ヶ、其上も無心元間、信州河中嶋へ出馬、及六十日立簇、甲州相押候故、時盛悃望之間、私睦之由、先以可勝候、向後弥輝盛可被加意見候事、簡要(肝)至極候、万余村上義清可為伝(演)説候、恐々謹言、

（永禄七年）
十月廿日　　（上杉）輝虎（花押）

河上式部丞殿(3)

○史料B　河田長親書状

翰札披見祝著之至候、仍而今度時盛(江馬)重而被為背国方晴信御一味、被企再乱儀、無是非次第ニ候、然ルニ其方被慮先節自輝盛御内談、至于越中境被取探儀、寄(奇)特千万之由候、因茲高原之地江良(三木)頼・輝盛就可有御調儀、当方江被仰届間、則越中衆江申付、尚以無御心元由ニ而、信州江出馬、到于河中島、七月以往及六十日立旗、甲州被相押故、時盛御悃望証人被相渡、御一和、輝盛御本意之儀、可然候、弥以向後不相替御意見専一ニ候、其巨細披露御直札間不具、恐々謹言、

（永禄七年）
十月廿日　　河田長親（花押）

河上中務丞(富信)殿(4)

これらの書状によれば、永禄七年、江馬家の内部で対立が生じた際、輝盛方が越中境に出兵し、上杉氏のために働いたことが知られる。おそらく江馬氏の中地山築城もこの頃と考えられ、その後、江馬氏はここを拠点に上杉氏に与(くみ)する形で越中国内でも活動することになったのであろう。ただし、江馬氏は必ずしも上杉一辺倒だったわけではなく、一方では武田氏とも交渉を保つなど、飛騨という国の地理的・政治的特性上、特別の配慮を払っていることも見逃せない。

ところで、文政元年（一八一八）の書上申帳などには、中地山城主を河上中務と記しているが、この河上中務丞富信は前掲史料にも見るように、江馬氏の重臣として上杉氏との交渉にあたっており、永禄年間以降、中地山に在城していたと考えられる。

江馬氏は一時、越中・飛騨間の交通路を一手に掌握していたともみられる。たとえば、越飛間の西側幹線ルートにあたる神通峡谷沿いの道筋については、次の史料があり、永禄八年（一五六五）の時点で河上氏が吉野・庵谷・笹津を通る飛騨の牛荷に対し、通行手形を出していることが知られる。

○史料C　河上綱通行手形

高原弁屋(紅)牛壱つ、役銭其外い覧(マヽ)なく可通候、仍如件、

永禄八年
六月十日　　綱(河上)（花押）

吉野
魚谷(庵谷)
篠津(5)

また、中地山は一方で水須・有峰・大多和峠を経由する「うれ往来」によって飛騨に通じていたが、この道筋は中世の主要道であった鎌倉街道にあたるといわれる(6)。「うれ往来」は高所の山岳地帯を通るため、冬期間の通行は不可能であったが、それ以外の季節にはよく利用されたとみられる。同ルートは、越飛間の東側幹線ルートにあたるが、このように東西の幹線ルートを支配下に置き、両国間の交通と流通を統制する形で、江馬氏による越中進出、そして中地山城の築城が図られたわけである。

池田城跡遠望

なお、永禄十二年（一五六九）、中地山北方の池田城に在城した寺嶋職定は、上杉氏に敵対して同城にたて籠ったが、同じ頃、江馬輝盛は次のような制札を対岸の芦峅寺に下している。

○史料D　江馬輝盛制札

(輝盛)
(花押)制札

右、当村中へ乱妨狼藉、令停止畢、若人数等出入候共、少違乱有間敷者也、仍如件、

永禄十二　九月二日(7)

これは上杉方に立つ江馬氏が寺嶋氏の動きを牽制するために出したものであり、池田城を中心とする寺嶋氏と芦峅寺付近をはさんで対峙していたことを物語るものである。中地山城一帯は、この頃最も大きな軍事的緊張期を迎えたと言ってよく、東方の小見城や原砦などの整備もこうした情勢を背景に進められた可能性が強い。

このののち、江馬氏の上杉氏に対する軍事的協力は元亀年間にもみられる。すなわち、加賀の一向一揆が富山城を占拠した元亀三年（一五七二）、謙信の富山城包囲陣に江馬勢が来援していることが、次の史料により知られる。

○史料E　上杉謙信書状

重而申遣候、（中略）昨晩江馬方被打着候、為此迎源五（村上国清）方被越候へ者、自敵陣可乗切様ニ見へ候つる間、出備候得者、あなたヨリ此方之武見之衆へ押懸候、豊前守（河田長親）者共助合、敵十余討捕、富山へ押籠候、其時惣備敵出候つる、身之事者、見知不申候、吉益・五十嵐申分者、三千不足の由申候、又身之見量ニハ、四千内外之由見切候、兎角ニ四万・三万与申つる趣、不審ニ候、跡之陣ニ者、小簇も人数も一切無之候つる、昨日自未明、小簇を巻、火宮筋へ無際限敵帰候、是ハ越前衆敗軍共申候、又増山衆払陣共申候、又能州当方江連々被申候つるが、加様之義（儀）ニ付而共申候、其故敵之人数無衆ニも候歟、不審ニ候、万吉重而、

謹言、

（元亀三年）九月十八日　　（上杉）謙信（花押）

山吉孫次郎殿
河田対馬守殿
北条下総守殿
専柳斎
長尾喜平次殿

追而、（以下略）(8)

一向一揆は、この年六月、越中西部の五位庄より東進してまず火宮城を攻略し、続いて五福山などで上杉勢を破り、ついには富山城を占拠して、上杉勢と対峙した。これに対し、越後からは謙信自身が出馬し、次第に包囲を強める中で、江馬氏に対しても参陣の要請がなされたものであろう。謙信の在陣は翌年にまで及ぶ長期のものとなるが、江馬輝盛自身は十月十四日以前、急に謙信に断わらず帰国したらしく、あとでその帰国を陳謝する書状を謙信に送り、謙信からは次のような書状が折り返し、河上氏に対し送られている。

○史料F　上杉謙信書状

内々自是可申遣処、従輝盛（江馬）預音信大慶候、随而輝盛帰国為知候は、外見に候間、送をも可申付処、不時ニ帰路候、於世間悪様に可申唱事、笑止々々、乍去於愚老、不懸気候間、如最前、入魂相違有間敷候、爰をば可然様に取成、可為大慶候、猶輝盛江申候間、不能重意候、恐々謹言、

（元亀三年）十月十四日　　（上杉）謙信（花押）

河上河内殿(9)

この書状から、輝盛自身が軍勢を率いて上杉陣に参陣していたことが明らかとなる。その参陣期間は、E・F二点の史料からみて、九月から十月にかけて、実質一ヵ月にも満たない短いものであったと言える。

このように江馬氏は謙信の越中平定にあたって、一定の軍事的役割を果たしているのである。一方、軍事面だけでなく、上杉氏にとって飛騨は上方などの情報源ともなっていた。たとえば、元亀四年（一五七三）の四月二十五日付で、河上富信が武田信玄死去の情報を越中在番の上杉部将河田長親に伝えているのは、その一例である。

○史料G　河上富信書状

態令啓上候、（中略）一、上方之義（儀）、信長御上洛ニ付、公方様（足利義昭）被去御座候而、被成御懇望、二才之　御曹子様人質ニ信長へ有御渡、御無事之由、然共、御舘石垣以下被直候、京中一変ニ候而、若君様有御供奉、江州栁山迄御納馬候処、都ニ被残置候信長臣下衆、公方様へ有被申事、再乱由而、又自栁山御上洛と承候、如何与相果可申候哉、海道説之分申入候、一、信玄之儀、甲州へ御納馬候、然間御煩由候、又被成死居（去）候共申成候、如何、不審存知候、一、濃州尾州之儀、甲州入与有陣触由申候、此段候者、信玄御越度も実説かと存知候、右、此条々、御屋形様へ雖可申上候、巷説不実存知候付、無其儀候、事実ニ承候者、可申入候、定而其方へも種々雖可被聞召候、海道説之分申入候、替子細候者、追而可申上候、恐惶謹言、

（元亀四年）
卯月廿五日　　河上中務丞
（長親）　　富信（花押）
河田殿
まいる　人々御中(10)

この中で、河上富信は信長の本拠、美濃や尾張では「甲州入り」と称し、陣触れをしているうわさを伝え、そうであれば、信玄の死去も真実かもしれないと述べている。この情報を得た河田長親は、四月晦日付で「随而信玄遠行必定之由、不隠便申廻由候、如何様煩之儀者無疑奉存候」と、謙信側近の吉江喜四郎あてに報告している(11)。このようにして、畿内や東海地方の情報が飛驒の江馬氏などから越中在番の上杉部将を経由し、謙信のもとへ届けられたのである。

このののち、江馬氏による中地山城の維持は、少なくとも謙信の死去により越中情勢が大きく激動する天正六年（一五七八）頃まで続いたとみられる。とすれば、江馬氏が中地山城を維持した期間は、十四、五年程度であったと思われる。その後、城が使われた形跡はなさそうである。

なお、江戸時代に記された『江馬記』の内、輝盛に関する項には「一永禄八年武田家に属す。越中中地山に住す。稲田城とも云ふ。一天正元癸酉歳四月、信玄公御他界の後越後謙信に属し、長尾家を引出し、猿倉塩屋を討取り、輝盛領レ之。一天正六戊寅三月謙信御他界、同七月飛州高原へ移り、中地山は母方の伯父川上伊豆守忠輔預り候処、同九月国侍神保・徳山等中地山を攻む。輝盛国侍防ぎの為加勢を以て雖レ防後詰叶はずして、川上忠輔討死し中地山落城す。」とある。また、幕末～明治初年頃記された『江馬家後鑑録』の内、河上伊豆守忠輔の項には「江馬左馬守（頭）時盛の臣、輝盛母方伯父也。永禄八乙丑歳六月中地山城代に発向する。天正六年戊寅歳九月五日中地山城落る。伊豆守於二中地山一討死、中地山出張十四年の間也。」とあり、いずれも天正六年の落城を伝えている。この落城が事実とすれば、同年三月の謙信急死により、飛驒を経由し越中へ進出した神保長住や三木自綱、斎藤新五郎ら織田勢の攻撃によるものであろうか。『信長公記』巻十一によれば、神保長住の援軍として同年九月、越中へ入った斎藤新五郎らの織田勢は、上杉方の拠点であった津毛城（現大山町東福沢）をまず手に入れ、続いて太田本郷に陣取っている。あるいは、この軍事行動の一環として、中地山城も攻略されたのであろうか。しかし、残念ながら、この時の中

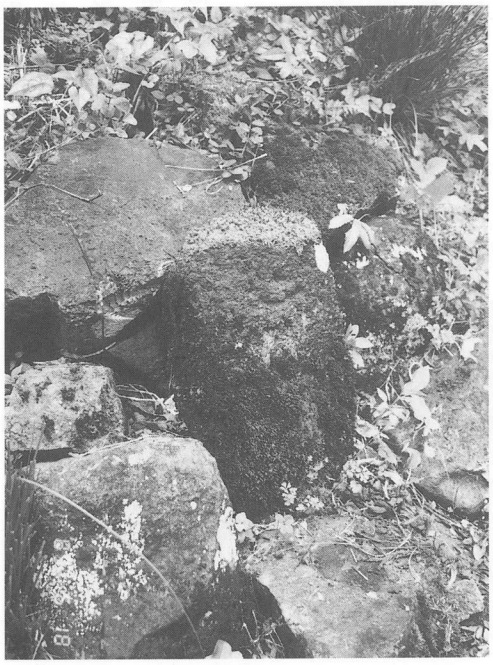
南側から見た城山

地山落城を具体的に裏付ける史料は、今のところ見出せない。

さて、中地山城の縄張は別添実測図に示すように、常願寺川に向けて張り出した広い台地を利用し、「城山（じょうやま）」と呼ばれる北側の小高い山（台地上での比高約一五m）を中心に、その南側から東側の二方を長大な空堀で囲郭するという、富山県内でもほとんど例のないものである。注目すべき点は、台地の南縁部を中地山から和田・小見方面へ抜ける道が東西に横切っていることである。実はこのルートこそ、常願寺川の左岸をたどる中世以来の古い道筋であり、今でも台地上の道沿いに、バン（金剛界大日如来）の種子を刻む中世の板碑が存在する（実測図中a地点）。また一方で、中地山は前述のように、水須・有峰を経由する「うれ往来」によって飛騨とも結ばれていた。こうした点からみて、中地山城が常願寺川の左岸道と「うれ往来」という、二本のルートを押さえる位置に築かれていることを理解できる。こうした交通路の掌握を背景に江馬氏は越中へ進出したのである。

城の構造や規模については、「文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳」に、次のような詳細な記述がある。

一、中地山館跡　中地山村領山続、東西拾三間程、南北拾七間程、石場石有之、同北之方下段ニ屋敷跡有之、東西三拾九間程、南北三拾弐間程、内堀幅六間程、長三拾弐間程、外ト堀幅拾壱間程、長弐百八拾四間程、外堀ゟ内堀迄間拾四間程、内堀ゟ館跡迄弐拾間程、入口南之方、東之方者常願寺川流申候、当時者田畑ニ相成居申候、先年河上中務殿御居住之由申伝候、年号等相知不申候


古道沿いにある中世板碑

この内、冒頭に東西十三間程、南北十七間程とある箇所は、現在の城山山頂部（A郭）をさし、ここが主郭にあたるのであろう。A郭の広さは二七×二五mで、ほぼ前掲書上申帳の記述に合致する。なお、A郭の東端には小山がそびえるが、ここは上部が極めて狭く、人が二～三人立てるぐらいの広さしかない（実測図中b）。最高所にあたることから、物見台の名残かと思われる。「石場石有之」とあるのは、山頂部付近に見られる大きな岩石をさすのであろう。また、「北之方下段」にある「屋敷跡」とは、A郭の北側一段下にある広い平坦地（B郭）のことであろう。ここは、広さが四五×五〇m程度で、今は「城天」と呼ばれている。位置からみて、ここが城内で最も中心的な居住施設の置かれていた所と考えてよい。なお、このB郭から北西側斜面には別の削平地が数段設けられ、最下段の常願寺川に面したへりには、低い土塁状の高まりがある。このあたりを「城天の袖」と呼んでいる。

内堀の屈曲部

また、常願寺川に面した削平地の西端には、上部が約四m四方の低い方形の高まりが見られる（実測図中C）。位置からみて、一種の櫓台状の遺構であろうか。

次に、「内堀」とあるのは、城山全体を囲む長大な空堀をさし、「外堀」とあるのは、内堀の南側に東西に続く低地帯のことであろう。この内、内堀の幅を六間程としているが、この数値は東側部分の内堀の現状にほぼ合致する。ただし、長さが三十二間程とあるのは現状より短く、合わない。また、「外堀」については幅十一間程とあるが、この数値は西側部分でほぼ現状に合致する。しかし、この外堀の長さを二百八十四間程としているのは、あまりにも現状より長すぎ、どこからどこまでを測ったものか不明である。

ところで、書上申帳の中に「館

大手口の内堀を南側より見る（右手奥が城山）

外堀を東側より見る

跡」という呼称が見られるが、これは現在の城山部分をさすものと思われる。また、「入口」が「南之方」とあるのは、主郭（城山）の大手が南方、すなわち現在内堀を渡る土橋状になっている所（実測図中ｄ）に向けて設けられていたことを示している。内堀にあたる所は、現在「ソーガワ」と称し、この堀底にある畑を「ソーガワの畑」などと呼ぶ。「ソーガワ」は、現在の富山市中心部に同じ呼称の地名を残し、「総曲輪」と表記する。総曲輪（総郭・総構）は一般に城郭の最も外側の郭をさし、富山市内の方は近世富山城の外郭部にちなんでいる。中地山城の場合、ここは内堀にあたり、この南側にまだ外堀がある。本来なら、外堀と内堀の間に存在する郭を総曲輪と称するはずである。しかるに内堀のラインを総曲輪と呼んでいるのはなぜか。それはおそらく、現状でも遺構が明瞭に認められる内堀のラインが、後世、実質的な城の外郭線と一般に見られていたことを物語るのであろう。とすれば、城山の麓をめぐる平坦面（内堀の内側＝Ｃ郭）が、この城の実質的な外郭であったとも言える。

さて、外堀にあたる南方の山麓低地帯は、以前水田や畑として利用されており、西側で幅一五～二〇ｍ、東側で幅二六ｍ程度を測る。ただし、現状を見る限り、堀として特に深いものではなく、今もはっきりと形態をとどめる内堀に比べ、その外観はあまりにも異なる。こうした現状から、この低地帯を堀とすることに疑問を抱く見方もあるが、縄張の上で、城山を中心とした郭群を南方の山続きから守るための防御線として、ここに堀を設けることは別段、不自然ではない。実際に外堀の中央部（実測図中ｅ）では、南の山続きを幅六ｍで掘り切ってあり、明らかに山側に対し、一線を画そうとした意図が見える。とは言え、全体として、この外堀の現状を見る限り、果たしてどの程度防御施設としての機能を発揮できたかは疑問である。

なお、前記のｅ地点付近には、北から外堀内に突出したような形で、小高い方形の張り出しが設けられている。上部は二七×二二ｍ程度の広さで、位置などから①大手口を守るための櫓台などの施設、②そばを通る常願寺川左岸道のチェックポイント（木戸、番所など）としての施設、などが考えられる。また、この張り出しの北東には八五×九〇ｍ程度のやや平坦な地域（Ｄ郭）が広がる。その中央に見られる方形の小高い台地は、以前電力会社の作った施設の跡で、付近も若干改変されている可能性がある。このあたりは「ナカノハバ」と呼ばれているが、「ハバ」は「馬場」の呼称が転じたものであろうか。南側に「殿様の馬乗石」と称する大石が以前あった（実

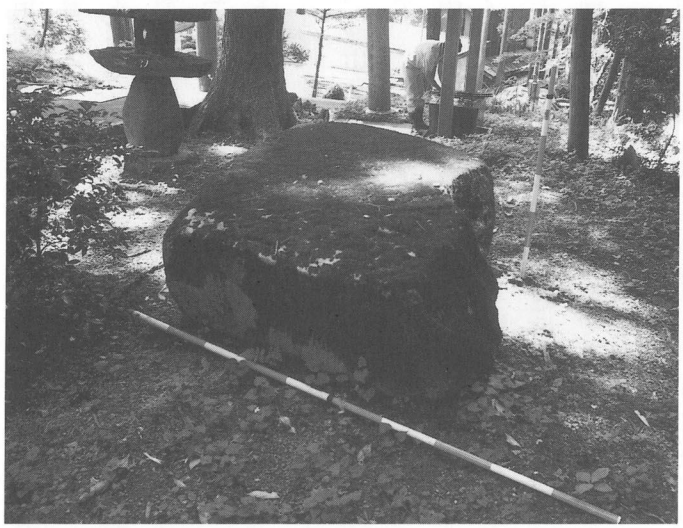
測図中f地点）こと、またそのそばに「ミズバ」（水場か）という地名があることも、そのことを裏付ける。

D郭は内堀の西端から、内堀と外堀の間の東西に細長い平坦面を経て、前記の「ナカノハバ」にかけての一帯に設定できるが、南側のへりを当時の交通路が通過することから、他の郭とはかなり違った性格を見せている。残された地名などからすれば、馬屋や馬場などが置かれた郭であろうか。

「城天」（B郭）の北東方向には尾根が続いているが、ここには南からの内堀の延長上に幅一三mの堀切を設け、山続きからの攻撃を防いでいる。すなわち、この堀切は広い意味で内堀の一部を形成する。堀切の南側には一二×九mの規模で掘り込んだ一画があるが、ここは「馬屋跡（うまやあと）」と呼ばれている。「馬屋」の呼称はともかく、実態は方形の空堀であり、位置から見て、内堀の内部の移動を制限するために設けられた施設であろう。堀切を越えると、二段の平坦面があり、この南側に「小丸山（こまるやま）」と称する小山がそびえる。上部は四×一〇・五m程度の広さで、周囲から切り立っており、北東の山続きに備えた櫓台の跡ともみられる。ここは下の平坦面と共に、城の東方に突出した出丸（E郭）を形成したとみられる。

なお、内堀は城山の南方で一二～一七mにわたり連続しない箇所がある（実測図中d地点）。ここは主郭に通じる大手口にあたることから、もともと堀を掘り残す形で、土橋状の通路になっていたとみられる。しかし、この土橋は本来、防御上の配慮からもっと幅が狭かったはずであり、後世、付近の畑作などのため土を入れ、拡幅されたものと思われる。また、土橋西側の内堀北側には、堀に沿って上幅二・五～五mの土塁が残る。この土塁は、もともと内堀に沿って東側へ伸びていたとみられる。内堀が東から北へ屈曲する箇所（実測図中g地点）に見られる小さな高まりは、その名残であろう。これらの土塁は、後世、堀を埋めたりする際に削られたものとみられる。

総じて、中地山城は単なる戦闘目的の要害ではなく、むしろ江馬氏の越中進出を支える政治・経済的拠点としての性格を有していたとみられる。そのことは、城が台地上に築かれ、居住性に富んでいること(12)、また、外郭の内部を常願寺川左岸道が通過していることによっても端的に裏付けられる。



殿様の馬乗石（現在は中地山神社境内）

註

(1)（永禄十一年）二月二十六日付で寺嶋職定は芦峅門前百姓中あてに、諸商人が信州へ通行することを禁じており（『県史中』一六七四号文書）、その以前から芦峅～立山～信州の交通路があったことが知られる。

(2)文明七年五月二十一日付寺嶋誠世・某宗綱連署奉書（『県史中』八八七号文書）

(3)『県史中』一六五七号文書

(4)同右、一六五九号文書

(5)同右、一六六三号文書

(6)服部英雄「史跡の見方・調べ方―地名・城館・荘園―」（『文化財保護の実務』）

(7)『県史中』一七〇一号文書

(8)同右、一七八四号文書

(9)同右、一七九三号文書

(10)同右、一八一四号文書

(11)同右、一八一五号文書

(12)江戸時代の書上申帳などの多くが、中地山の遺構を「館跡」と記しているのは、そのためであろう。

中地山城跡付近の航空写真

六　原砦

標高　四三〇m
比高　七五m

この遺構は、昭和五十九年に県埋蔵文化財センターの調査によって発見されたが、過去の文献史料には記されていないものである。位置は、立山国際ホテルから西に大きく張り出した台地の先端をさらに二〇mも急斜面を下った所で、北を常願寺川、南から西を牛ケ首谷川が流れる。二つの河川の合流点に臨み、川に面した三方はいずれも急崖である。また、東方の台地からは、前述のとおり急峻な斜面によって隔てられている。実に要害な地形と言わねばならない。

遺構は図5に見るように、台地の中腹から北西に向けて張り出した尾根の平坦面を利用し、南の台地側と西の小尾根にそれぞれ一カ所の堀切を設けている。これら二カ所の堀切によって守られた平坦面が郭の跡とみられ、その規模は二〇×三五m程度である。南側の堀切は上幅一一m、深さ二m（発掘調査による）、西側の堀切は上幅八m、深さ二mを測る。南側の堀切自体は傾斜もゆるく、浅いものである。これに対し、西側の堀切は人が一人位しか歩けない細尾根（両側は急崖）を断ち切ったもので、これによって西方の尾根続きと画されている。

今のところ、遺物は発見されていないが、表土下の土層からは炭化物が多数検出された。この遺構の性格については、今一つ明確ではないが、付近の険しい地形と堀切（防御施設）の存在から、中世の城館遺構と考えた方がよさそうである。本書では、便宜上、「原砦」と呼ぶことにする。

原砦跡遠望（南方より。中央、一段低い尾根上）

この砦がどのような目的で、誰によって築かれたか、文献史料や伝承の中にも直接の手がかりは見出せない。しかし、西方の中地山城や小見城と立地上の共通点を持つことが注目される。すなわち、城地の二方または三方を河川がめぐることであり、いずれも常願寺川とその支流の合流点に臨んでいることである。

こうした城郭の立地上の共通性は、単なる偶然とは考え難いものがある。むしろ、同一の築城者によって、同一の目的のもとに築かれたとみる方が自然であろ

南側の堀切（手前は発掘調査によるトレンチ）

う。一つの手がかりとして、これら三城砦がいずれも常願寺川を隔て、芦峅寺と向き合うように位置することがあげられる。このように、芦峅寺を意識した城砦の配置は、何を物語るのか。それはおそらく、芦峅寺側の勢力と常願寺川南岸の勢力が当時、軍事的な緊張関係にあったことを物語るのであろう。その緊張関係とは、永禄末期における中地山城主江馬氏と芦峅寺を支配する池田城主寺嶋氏との対峙関係を示すように思われる。

以上の点からすれば、原砦は小見城と同様、越中へ進出した飛騨の江馬氏が中地山城を本拠として対岸の芦峅寺に備えるため、常願寺川沿いに設けた出城であること、そしてその構築時期は、江馬氏が寺嶋氏と敵対関係に入った永禄十二年（一五六九）頃である可能性が高いとみられる。いずれにせよ、砦が立地する険しい地形を考えた場合、ここが長期にわたって存続したとは思えない。日常的な居住には、ほとんど適さないことから、軍事的な緊張下にごく一時的に使用されたものとみるべきであろう。

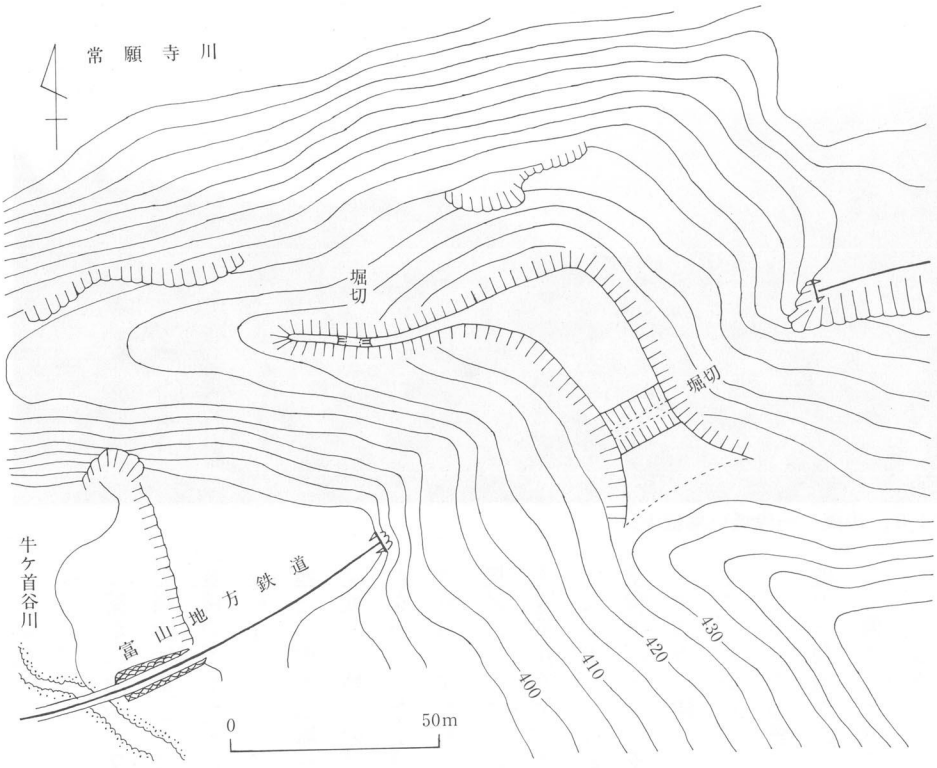


図5　原砦遺構概念図

七　日尾城

標高　二三〇m
比高　九〇m

日尾は熊野川の支流、黒川の西岸に位置する集落で、城はその西側に南北に連なる尾根の北端に築かれている。ここから南へは黒川の谷沿いに瀬戸、石淵、下双嶺へと続く道筋があり、城はちょうどこの谷筋の入口を押さえる形で存在する。

城の縄張は図6に示すように、南西から北東に向けて伸びる尾根上に郭を連ねる形式である。まず、南端にあるA郭は城内での最高所にあたることから、この城の主郭であったとみられる。郭の広さは一四×二三・五mで、東西両側に一段低く小平地が付随する。また、郭の南側のへりには、下の堀切に臨んで低い高まりが見られ、かつて存在した土塁の痕跡とも思われる。郭の南側下に設けられた堀切（No.1）は、上幅が九mあり、この堀切を境に城域が画される。

日尾城跡遠望（北方より）

A郭の北側を下ると、幅広い平坦地が尾根上に続いている。この平坦地はC郭までの間に三段にわたって伸びているが、一番南側のA郭と接した一画が最も広くなっており（二〇×三九m）、A・C両郭の中間に位置する郭（B郭）であったとみられる。

さて、C郭は北側に堀切（No.2）を配し、これによって北方の尾根伝いを遮断している。この堀切は東西三一mに及ぶものであり、尾根の両側をそのまま下って、一部で竪堀状を呈する。北から堀切を越えると、堀切を見下ろす形で小平地（一一・五×四・三m）が設けられ、この一段上にC郭（一九×一七・五m）がある。郭の南側は急峻な斜面となっている。

C郭から尾根伝いに約七〇m隔てた所に、D郭がある。ここは尾根の北端部にあたり、一〇・五×一九・二mの平坦面が尾根の東側を削って設けられ、削り残された西側は上幅一～一・五mの土塁状となる。また、郭の東側一m下には幅二mの細長い平坦地が付随する。この郭は前述のようにC郭から隔たった所にあり、位置的に見て、北端部に設けられた出丸の役割を果たしていたと思われる。ここからは梢ケ原～樫ノ木と続く谷の入口も見えることから、そうした交通路の押さえとしての意味もあったであろう。

ところで、日尾城については、『三州志』をはじめ、文献史料にも記載がなく、特に伝承も残されていない。しかし、城の東麓を通る黒川沿いの道筋は、ずっと南方で下双嶺、大清水を経て檜峠を越え、神通川東岸の薄波に抜けるルートであり、その先で神通峡沿いの飛騨街道（東道）に合流する。このことから、黒川谷のルートは

飛騨方面と直結する古い交通路だったことが知られるのであり、この城もそうした中世の越中・飛騨間の交通路と深く関わっていることがわかる。

なお、黒川沿いのルートを経て、薄波から神通峡の飛騨街道をたどる道筋については、中世にかなり利用されたとみられる。たとえば、長享三年（一四八九）美濃の詩僧万里集九が越後から越中を経由し、飛騨へ抜けた際にこのルートが使われたとみられる。一行は五月二日、黒部四十八ケ瀬を渡り、翌三日滑川を過ぎ、四日には神通峡沿いの吉野にたどり着いている。そして、五日には吉野を出て、猪谷の関所を過ぎ、飛騨へ入っているのである(1)。おそらく、この時の滑川～吉野間は、前述の黒川沿いのルートが使われたと考えられる。

北側よりＡ郭を見る（奥の一段高い所）

また、戦国期に入ると、越中・飛騨間の軍勢の移動などにも利用されたであろう。天正六年（一五七八）三月の上杉謙信急死により、かねて越中進出を図る織田信長は同年五月、神保長住を飛騨から越中へ入国させた。そして、九月二十四日には斎藤新五郎が援軍として越中に入る。この時、東福沢の津毛城には上杉方が守っていたが、織田勢の進出を聞き、同城から撤収し、今泉城にたて籠った。このあと、新五郎は津毛城に神保氏の兵を配置し、十月四日の月岡野の合戦では上杉勢を大いに打ち破った(2)。

この戦いの前に、津毛城にいた上杉勢が撤収したのは、斎藤新五郎の率いる織田勢が神通峡からまさに黒川谷のルートへ入って来たからだと思われる。このため、津毛城は直接南から脅かされる形となり、守る上杉勢が北方の今泉城へ退いたのであろう。

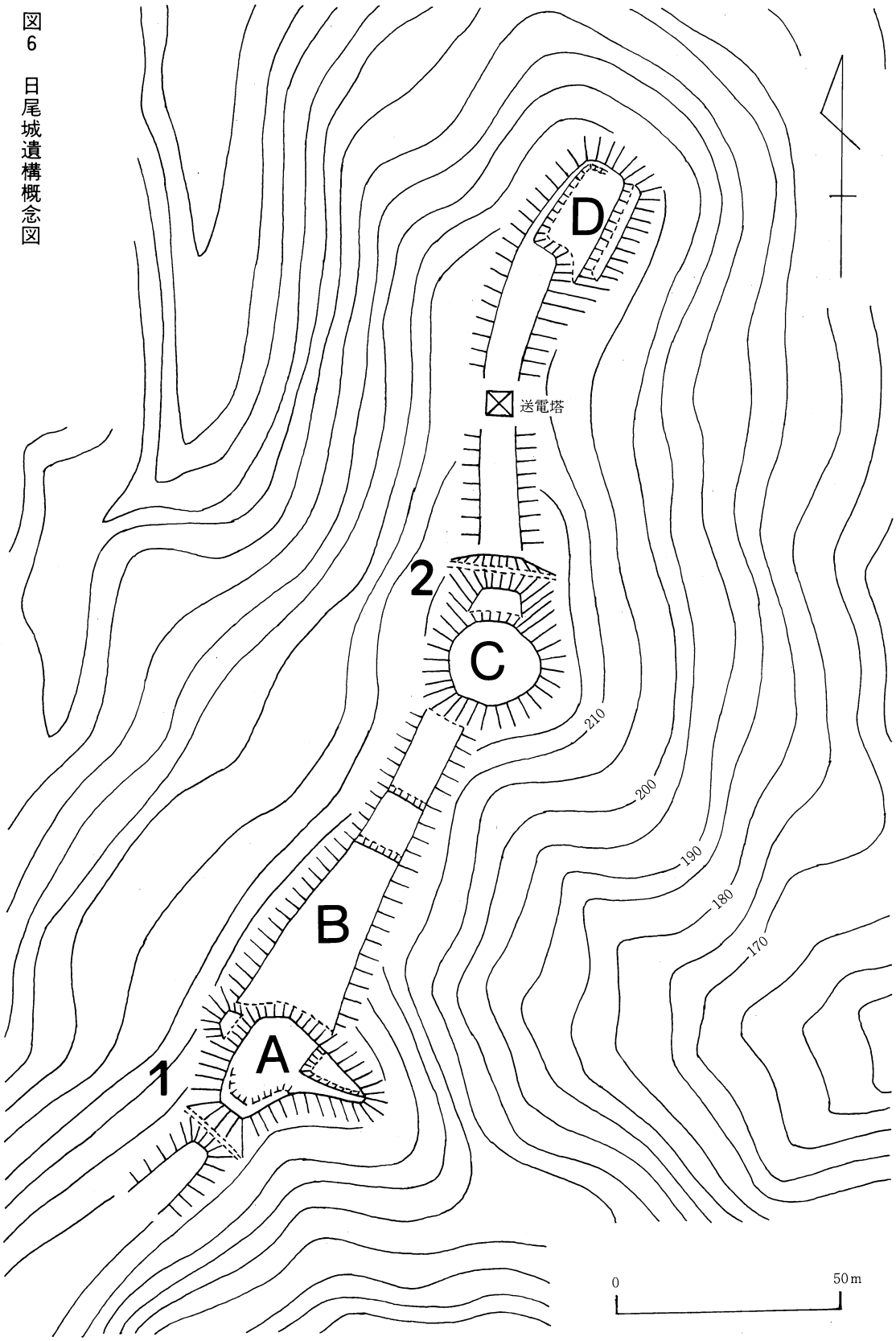
以上の例からみて、この黒川谷ルートの利用は中世でもかなり早い時期にさかのぼると考えられるが、日尾城の築城がそうした交通路を押さえる目的を持っていたことは、まず間違いあるまい。

註

(1)「梅花無尽蔵」

(2)『信長公記』ほか

図6　日尾城遺構概念図



八　文珠寺城

標高　三六〇・九m
比高　一五〇　m

熊野川の左岸、西小俣と長瀬の中間にそびえる山上に城跡がある。付近の小字を「城割」といい、かなり以前から城跡として知られていたようである。この山の東西は急斜面で、南北方向だけが尾根続きである。郭の配置は図7で見るように南北二つの峰に分かれ、一段高い南の峰の方が主体部である。まず北方の峰（B郭）から見てみよう。ここは南北に細長い平坦地で、北端が少しふくらんだ形をとる。幅は中央部で九m、南北の長さは六三mである。北端には一段小高くなった一画があり、ここから北方の尾根筋を見下ろすことができるため、あるいはその方面に備えた櫓台の跡かもしれない。

文珠寺城跡遠望（北方より）

この北側の一段下には、上幅五mの堀切（No.7）が尾根の西側に掘られている。東側部分は現在見られる尾根道のため削り取られ、消滅したのかもしれない。この五m北には、上幅六・四mの堀切（No.8）が長さ一三mにわたり、尾根を横切る形で設けられている。しかし、この堀切は今では少し窪んで見える程度で、ほとんど埋まっている。中央部には幅〇・七m程度の土橋の痕跡がある。B郭の南側で斜面はだらだらと南へ下るが、南方の峰との鞍部になった所に上幅五mの堀切（No.6）がある。また、ここから南へ一段高くなった所には、上幅七mの堀切（No.5）がある。この堀切とA郭との間はかなりの段差となっており、城内でも最も守りの固い箇所である。

さて、南方の山上（A郭）は北から南東へとゆるくカーブした形を見せるが、中央のくびれ部の少し南側に土塁が設けられ、ここを境に南北二つの区画に仕切られている。便宜上、北側をA^2郭、南側をA^1郭と呼ぶことにする。この内、A^2郭は一七・五×五四・五m、またA^1郭は一三×三七mの広さである。なお、中央部の土塁は上幅二m、長さ一二mで、南側からの高さは一・五mを測る。これら二郭の内、主郭となるのは、最高所にあって、最も守りの固い北側のA^2郭であろう。

A^2郭の東側から北側にかけては、一段低く幅二～七mの帯郭がめぐる。これは同郭の東側斜面がゆるい傾斜となっていることに対応した防御である。この帯郭の中ほどには、上幅三・五mの堀切（No.3）が設けられ、帯郭上の通行を制限している。また、A^2郭の北西部には、西方に向けて伸びる尾根が見られるが、この尾根の付け根に上幅四mの堀切（No.4）が設けてある。堀切の中央部には幅〇・六mの土橋も見られる。このようにA^2郭は城内で最も防御の固い郭

となっている。

一方、A[1]郭の中央部やや西寄りに高さ〇・六mの小さな高まりがあるが、その性格は不明である。同郭の南端からゆるい斜面を一〇m下ると、かなり埋まっているが、上幅三～四mの堀切（No.2）の痕跡がある。中央には幅一m程度の土橋跡も見られる。ここからやや急な斜面を南に下ると、南方へ伸びる水平な尾根に立つが、その付け根にあたる所に堀切（No.1）が設けられている。この堀切は、南側で深さ二mを測る。ここから南へは、人が一人歩ける程度の細尾根が伸びており、さらに南にそびえる山との鞍部に尾根を東西に越える道が見られる。おそらく、かつて熊野川の谷と西側の谷筋を結んだ小さな峠の跡であろう。こうした峠を押さえることも、中世の山城の重要な機能の一つであった。

堀切（No.5）を東側より見る

この城に関する史料として、（永正十二年＝一五一五）十月十三日付の細川高国感状がある。

去八月十六日越後衆、当保（太田）乱入之処、於文殊寺令防戦被疵之由、注進到来、神妙候也、謹言、

十月十三日　　高国（細川）（花押）

上野彦次郎とのへ(1)

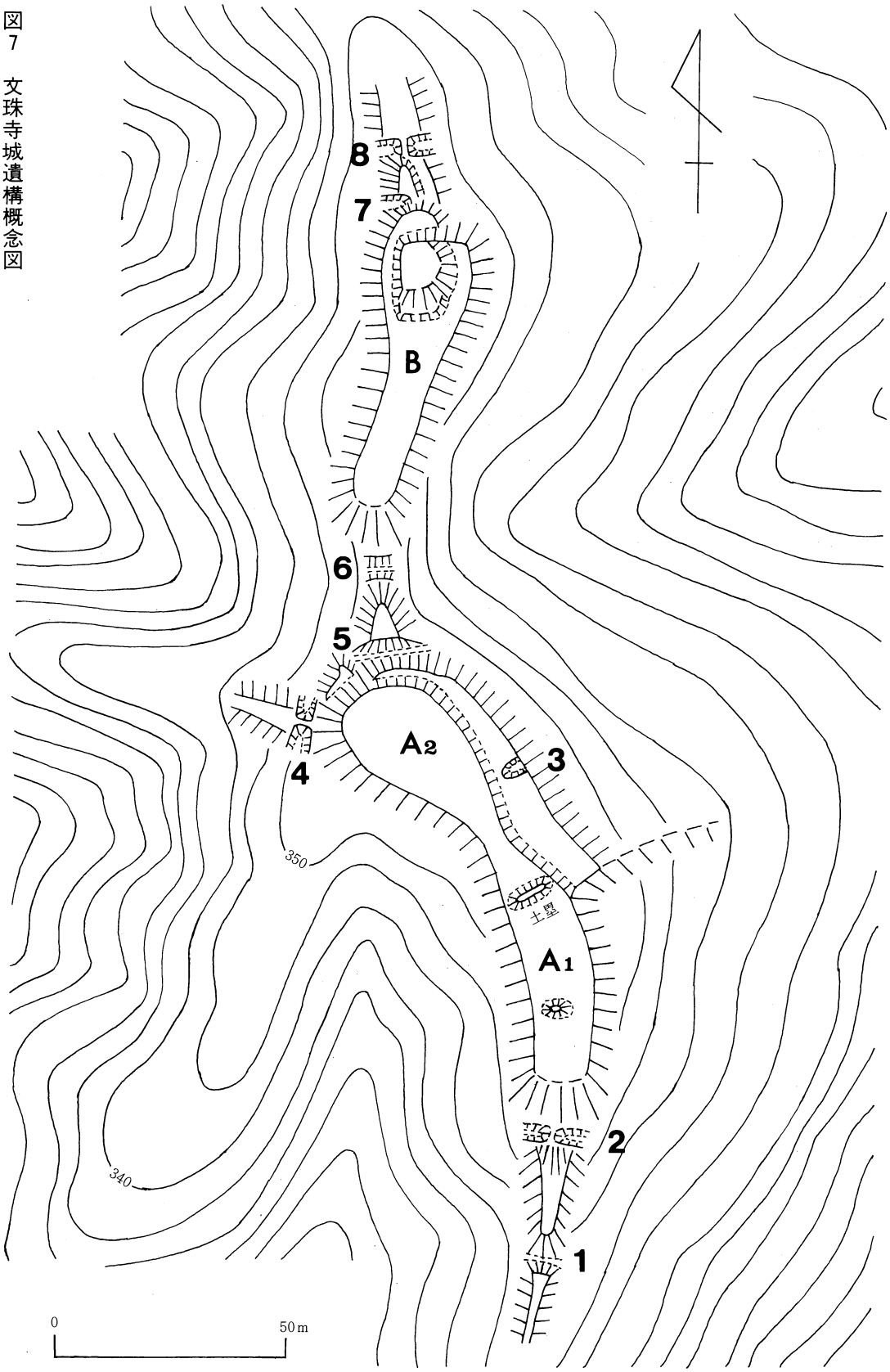
宛先の上野彦次郎は、太田保二俣村の土豪であり、この時点で他の太田保内の国人・土豪と共に細川氏の指揮下に入っていたことがうかがえる。それはともかく、この年、畠山尚順と結んで一向一揆の排除を図る越後守護代長尾為景の軍勢が越中へ進撃した際、越中の国人・土豪衆はこれを長尾方の一方的な越中侵略とみなし、猛烈に反撃した。前掲感状はこの時のものであり、その結果、為景の進撃は挫折したのである。そして、この戦いの折、上野彦次郎が拠って「防戦」したのが、この城であると考えられている(2)。

全体的に見て、この城は南北に長く連なる形で、規模は大きく、比高一五〇mの高所にあって文珠寺地域の拠点としてふさわしいプランを示す。しかし、堀切などは早く埋まったようであり、わずかに痕跡をとどめる状態のものが多い。また、郭自体もさほど広いものではなく、削平も不十分で堀切も一部を除き、小規模である。これらの点から、①城はごく一時的な要害として築かれたこと、②築城時期は、戦国期でも早い時期とみられること――などが推測できそうであり、永正年間の前掲史料にほぼ合致するとみられる。

註

(1)『県史中』一二五三号文書　(2)『大山町史』、『大山の歴史』

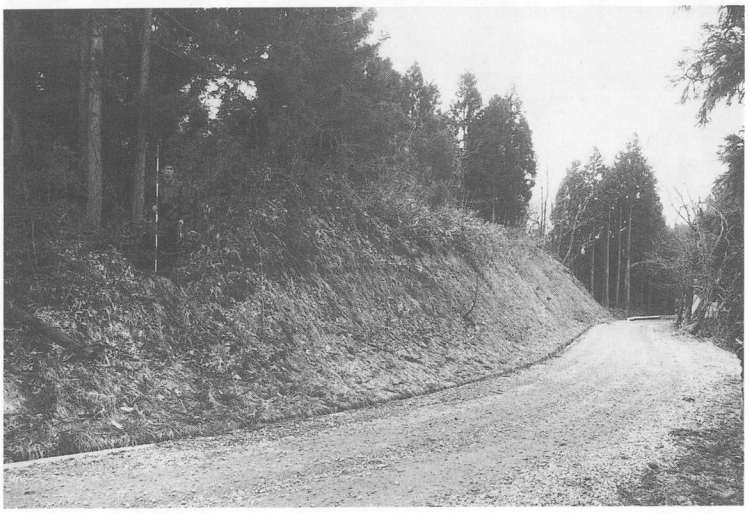
図7　文珠寺城遺構概念図



九　湯端城

標高　二六五m
比高　七五m

城跡は常願寺川左岸の段丘上に位置する。この北は谷を隔て上野段丘に連なり、東側が常願寺川、西側が熊野川にはさまれ、南だけが平坦な段丘面となって続いている。城は段丘面の北端付近に位置するが、ここは北の上野段丘から一段高くそびえており、しかも両方の段丘の間は東西から谷が入り、細い尾根となって結ばれる。地形上、北方に対し守りを固めた備えである。ここはまた、上滝付近から段丘を南下した道が、城跡の手前で東側に下り、常願寺川左岸沿いのルート（岡田～松木～中地山）に連なる所でもある。城は、まさにこの交通路を押さえる要衝に築かれており、中地山城などと同様、城館と交通路との密接な関係を示している。



東側から見た城跡（左手、人物の立つ位置に空堀がある）

ところで、この城に関する史料は少なく、『三州志』故墟考の「中地山」の項に、「一説、飛州の士川上中務此の城に居し、三室郷湯端城主畑九郎と迫合ふと云ふ。」と記しているのみである。この伝承を事実とすれば、中地山城を拠点とする江馬氏の勢力が湯端城付近まで及んでいたことになろう。『大山町史』によると、畑氏は「飛騨高山辺にも活動した氏族で、南北朝時代の宮方武将、畑九郎の裔と考えられる。（中略）なお、有峰村の元和二年文書には「はた」の名を持つ一家があった。」としている。

城のプランは図8で見るように方形単郭形式であり、常願寺川に面した東側を除く三面に土塁が残っている。東側は常願寺川の急崖に面していることから、もともと土塁が設けられなかったか、あるいは現在の道路を作った際に城域の一部と共に削り取られたか、そのいずれかであろう。

郭の規模は、土塁部分も含め五五・五×三〇m程度で、南側から西側、また北側の一部に空堀がめぐる。もとはおそらく、土塁の外側すべてにめぐっていたのだろうが、後世次第に埋められ、今見るような状況になったのだろう。空堀の上幅は北側が三・六m、西側が五・六m、また南側の東端部で四・七mを測る。本来の幅は、おそらく三間程度だったのだろう。堀底から土塁の上端までの深さは、北側で一・四m、西側で一・八m、南側東端部で一・六mである。土塁自体も、後世に多少削られているらしく、郭の内部からの高さも〇・六～〇・九m程度しかない。なお、出入口は西側土塁の南部と北側土塁のほぼ中央の計二カ所に設けられている。

南側の空堀と土塁

遺構上、特に注目されるのは南側土塁の中央部に設けられた張り出しである。この箇所では、土塁が南側の塁線より約二m余り外側に張り出した形状を示し、空堀もこの張り出し部に沿った屈曲が施されている。この張り出しがどのような機能を有するのか、必ずしも明確ではない。一つの考え方として、郭内から木橋を架け、外部との出入口とするための施設とも考えられるが、①過去の同様の遺構を有する城館の発掘例では、いずれも堀がその分狭くなる(1)のに対し、ここでは張り出した分だけ堀が外側に広げられていること、②ここに出入口を設けたとすれば、土塁にも開口部が存在しなければならないのに、ここではその形跡がないこと――などから、出入口のための張り出しとは考え難い。とすれば、横矢掛りのための「邪(ひずみ)」(2)と考えるべきなのか。福光町の桑山城跡にもよく似た遺構があるが、この種の施設をどうみるかは、今後の課題であろう。

ところで、城のある段丘北側から西側にかけて、深く掘り込まれた、一見空堀状の溝があるが、これは後世、北の上野段丘側からこの段丘へ登るための道として作られたものであろう。このことは、城の北西隅で空堀が溝によって切られていることからも裏付けられる。

城跡からは東方に常願寺川の対岸、北西方向に熊野川沿いの谷筋を望める。城のプラン自体は、基本的に方形単郭の素朴なものであり、段丘のへりに位置するとは言え、さほど防御力の高いものではない。空堀や土塁の規模からみると、どちらかと言えば、居館的な施設のようである。おそらく、戦国期前半以前の遺構であろう。

註

(1)新潟県新井市坪ノ内館跡（『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告』II　新潟県教育委員会、昭和六十一年）や富山県福野町寺家新屋敷館跡（『寺家新屋敷館跡』I・II　福野町教育委員会、昭和六十三・平成元年）など。この内、寺家新屋敷館では、張り出し部で堀がやや外側にふくらんでいる。

(2)虎口や土塁に近づいた敵を横から射撃（側射）することを「横矢」といい、横矢を掛けるため、塁線に屈曲を設けることを「邪(ひずみ)」という（『日本城郭大系』別巻II　城郭研究便覧）。

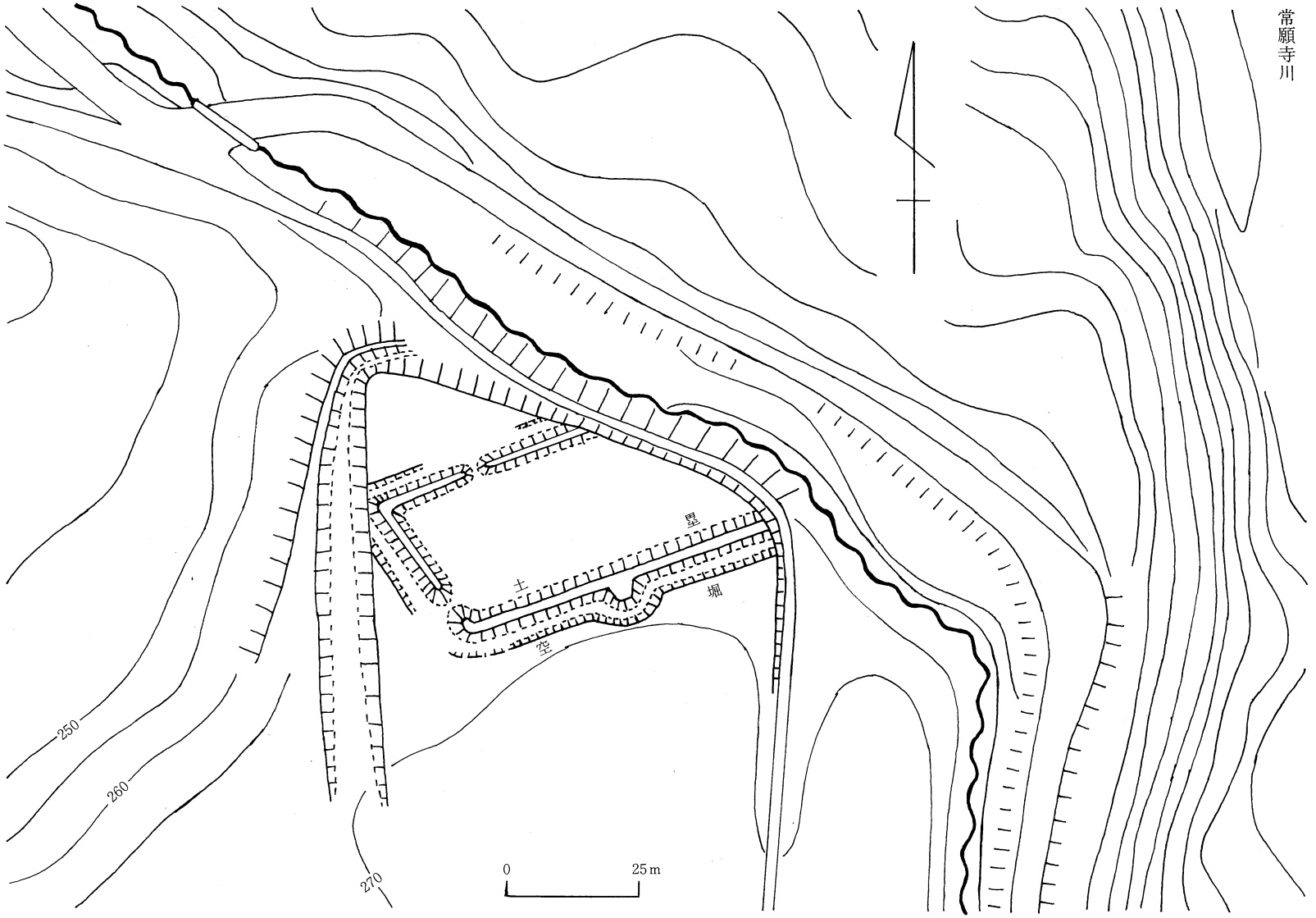


図8　湯端城遺構概念図

付・大沢野町の中世城館

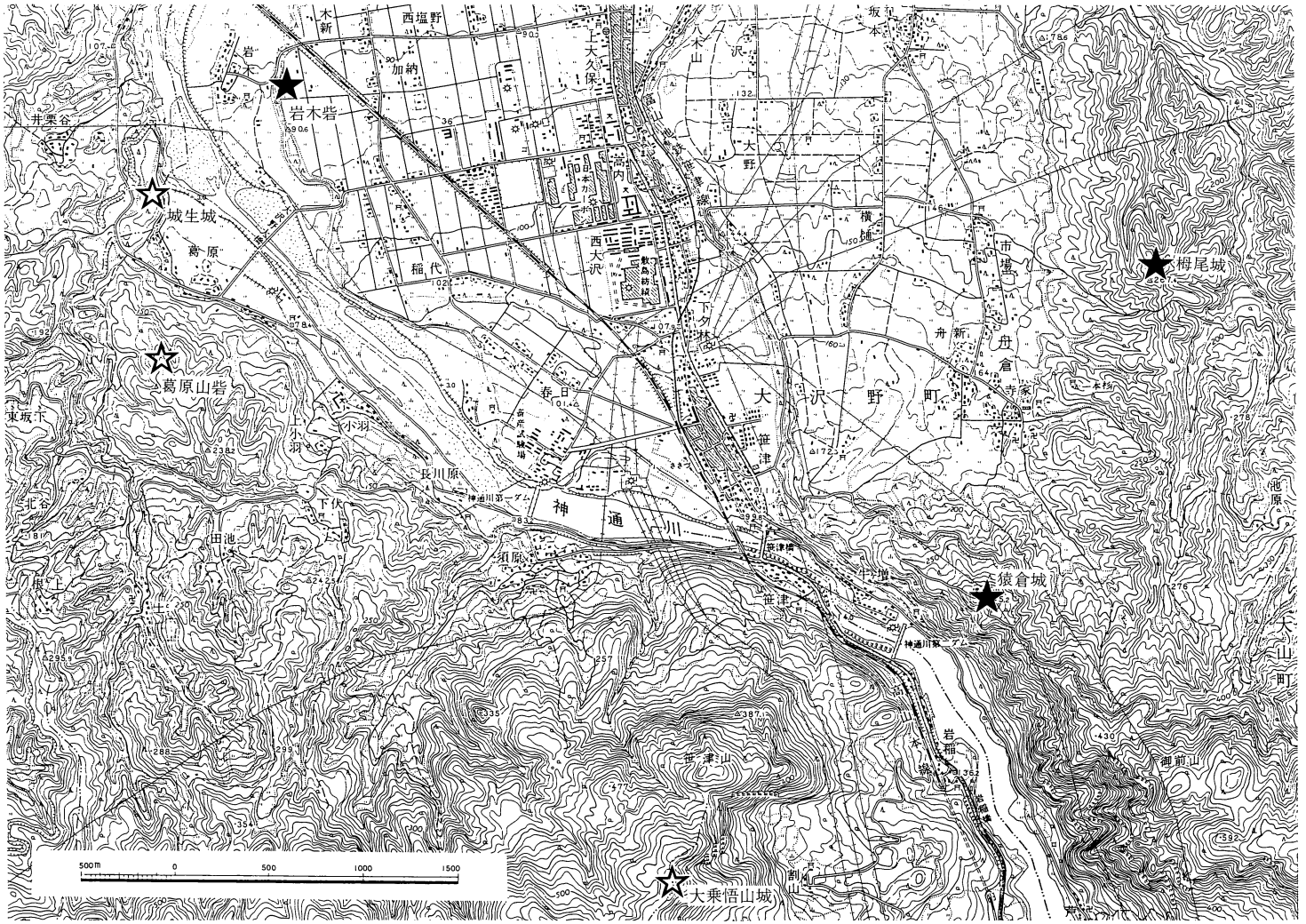


図 9　大沢野町とその周辺の城館

一　岩木砦

標高　九〇m
比高　一五m

岩木砦は神通川東岸の段丘上に設けられた砦で、北・東・南の三方は台地が続き、西側は崖に臨んでいる。砦跡の西の崖下には岩木の集落があり、さらに神通川をはさんだ対岸に城生城跡を望める。

『三州志』鞬櫜餘考によると、岩木砦は元亀二年（一五七一）飛騨の武将白屋（塩）秋貞が越中へ出軍し、栂尾・猿倉の二城を築き、城生城の斎藤氏を攻めた際の「附堡」（付城）であるという。この時、秋貞は部将の杉政三郎右衛門を砦に置いたが、斎藤氏が上杉氏に救援を求めたため、秋貞は上杉勢に追われ、飛騨へ退いたと伝えている。

一方、同じ『三州志』の故墟考によれば、次のように記されている。

○岩木　在宮川郷岩木村領。自富山未方三里奇。村迤東也。堡迹方八間。北存虎口・馬出遺體。又有東西六間南北八間一区。並塹土垣之遺歴々存。蓋此堡三面塩野西沿峪。按是城生城附堡。自城生町間三町二反許也。西帯用水河豎神通川。

元亀二年白屋秋貞、城生の斎藤信和を攻めんと、此の岩木に附堡を築くとあり。此の後秋貞佐々に降り岩木城主となりしを、村田縫殿助攻取り、後越後の杉政三郎右衛門居すと云ふ。杉政は元と城生の信和の麾下也。天正十一年佐々・神保城生を攻取るとき、諸士と共に杉政退去す。因りて佐々與左衛門を置くと也。又云ふ、杉政の末孫後に岩木村に往来し、遂に此の村民となり、享保中太兵衛といへる者、古の馬具等を猶伝蔵せり。

これによると、塩屋秋貞が岩木築城後、佐々成政に降り同城主となったのを上杉部将村田縫殿助が攻め取り杉政三郎右衛門を置いたとも、あるいはもともと杉政氏は城生城の斎藤氏に属していたが、天正十一年（一五八三）佐々・神保方の城生城攻略によりこの砦を退去したとも記しており、伝承自体もさまざまに混乱し、史実に合致しない点もある。しかし、大きく整理すると、砦は①塩屋秋貞が城生城攻めの際に築いた、②もともと城生城の出城で、斎藤氏の麾下であった杉政氏が守っていた――の二つに分かれる。

そもそも、岩木は神通川東岸にあって、古くは富山―経田―塩―岩木―笹津とたどる道筋に面した所であった。このルートは飛騨街道の一つのルートであったが、主要ルートではなかったようである(1)。また、岩木から対岸の城生までは古くから渡舟の便があった(2)。こうした点からすれば、岩木は富山―飛騨の南北ルートと岩木―城生の神通川を渡る東西ルートの接点にあたる所に位置していたことになる。このような交通上の要衝であったことが、岩木に砦を築かせた背景とみられる。

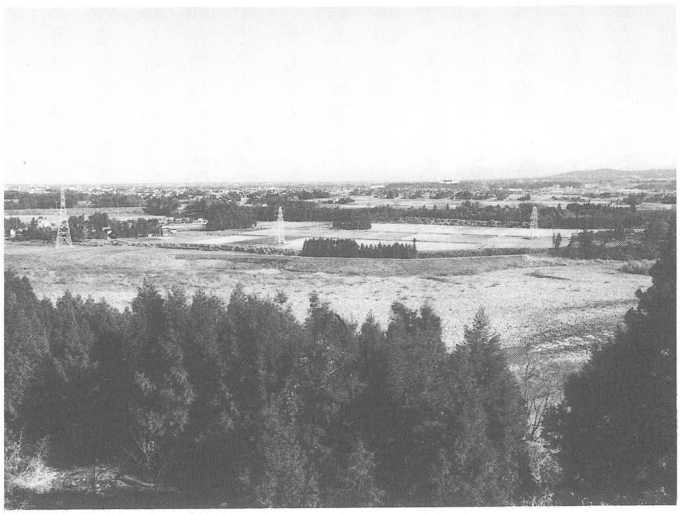
岩木のそうした位置からすれば、塩屋氏が砦を築く以前に、城生

岩木砦跡（北側より）

城の東の出城として斎藤氏による砦が置かれていても不思議ではない。また、天正十一年の佐々方による城生城攻めの際、佐々与左衛門がこの砦に置かれたとあるのは、城生城包囲の一環として、城生城と東方の上杉方の連絡を絶とうとする成政の意図によったのであろう。いずれにせよ、砦が使われた期間はさほど長いものではなかったと思われる。

なお、「附堡」（「付城」）とは「敵の城を攻めるために、その近くに造る防御用障害物、あるいは砦」のことであり、この砦を造ることを「付城をする」と言った(3)。すなわち、攻撃用の城のことであり、「向城（むかいじろ）」、「対城（たいのしろ）」とも呼ばれた。『日本城郭大系』別巻II・城郭研究便覧によれば、①敵の城を攻める際に攻囲軍が攻城用の足がかりとして築いた城。規模は小さいのが普通で、一郭ないし二郭ぐらいで、土塁や堀だけの掻揚の城である場合が多いとする他、②本城とは別に、国の境目などに築かれた支城のことをさす場合もあるという。本県の場合、元亀四年（一五七三）富山城を占拠する一向一揆を攻めるため、上杉謙信が周囲数カ所に築いた「向城」をはじめ、いくつもの例があるが、岩木砦周辺では天正十一年、佐々成政が城生城を攻める際、南方の葛原山に築いた付城があげられる(4)。

岩木砦自体は付城と呼ばれていることからもわかるように、規模は小さかったとみられる。前掲の『三州志』故墟考では、八間四方で、北に虎口や馬出の遺構があり、別に東西六間、南北八間の一郭もあったという。他に堀や土塁の跡も残っていたといわれる。現在は墓地になっているが、昭和四十年代の初めには高さ一・八mぐらいの土塁が一五、六mにわたって伸びていたという。



城生城跡より岩木砦跡を望む（手前は神通川）

註

(1)『富山県歴史の道調査報告書――飛騨街道――』

(2)「富山藩領絵図」によれば、岩木の地点に「舟渡シ」の記入があり、渡し場の存在したことが裏付けられる。

(3)『日葡辞書』

(4)高岡　徹「戦国期の越中における『付城』とその実態――富山県大沢野町葛原山砦を中心に――」（『かんとりい』第一〇号）

二　猿倉城

標高　三四五・二m
比高　一七五　m

城は神通川の右岸にそびえる猿倉山の山上に築かれている。山の一部はスキー場になっているが、周囲は急斜面で、特に神通川に面した側は崖となって、要害である。山頂からの見晴らしはよく、北に栂尾城跡、北西に城生城跡、南に大乗悟山城跡、楡原館跡、楡原山城跡などを望める。この内、北方の栂尾城とは直線距離でわずかに一・八kmを隔てるにすぎない。ここは、『三州志』故墟考に「飛州の喉、東西岐路の要衝也」とあるように、越中の飛騨口にあたり、富山から南下した飛騨街道が西麓の笹津で東道（神通川右岸）と西道（同左岸）に分かれる交通の要衝であった。

猿倉城跡遠望（南方より、手前は神通川）

主郭にあたるのは、山頂の平坦地（A郭）とみられ、広さは八五×二九m程度である。周囲は急斜面の要害だが、東側だけがややゆるやかな斜面となっており、ここに山頂部一段下のaからeまで、計五段の平坦地が階段状に設けられている。これらは、帯郭・腰郭にあたるものだが、階段状に連ねることによって、この方面からの攻撃に備えたものであろう。平坦地の幅はc～eで四～七m程度を測り、cの段が最も長く中腹を巡る。なお、最上段のaについては、北端に送電塔が設けられており、この建設の際に付近の旧地形が改変されている。

eの下を巡る道からさらに東側に下ると、北側にfの平坦地（五×一五m）、また南側にgの平坦地（二〇×二四m）がある。この内、南側の平坦地（B郭）は特に規模が大きく、しかも東側が深い谷に面していて、守りが固い。この谷は深さ一〇～一二mに達するものであり、南北に細長く伸びていて、空堀の役割を果たしている。

さて、江戸時代の史料は猿倉城跡について次のように記す。

○猿倉　船倉　在船倉郷船倉村領。與戸川城去ること十五・六町也。遺跡山巓にして、東は十六・七間に二十七・八間あり。西は十五・六間に二十間許あり。一方は接山、北は草野也。神通川北西に当る。篠津村等目下に臨む。飛州の喉、東西岐路の要衝也。富山より南四里。城図別に有之。

天正八年三木休庵船倉山に新城を築き、後に休庵の二男秀綱に小島三八郎小一作寺を副へ置くと飛騨軍記に見ゆ。又佐々成政これに居ると云ふ。歳月闕之。十三年秀吉公金森長近をして猿倉城を屠ると云ふ。（後略）（『三州志』故墟考）

○一、猿倉古城

船倉村領、今ハ柴山ニ成、寺嶋三八郎居住之由（「越中古城記」）

○一、壱ケ所　古城跡

但、同村領之内猿倉山与申古城跡御座候、此城主渋谷筑前守殿、戸川在城之節右城ヲ取立、両所懸持之由承伝申候、尤落城之後、佐々与左衛門殿入城之由承伝申候、村ゟ古城跡迄道程拾五町程、村方ゟ南之方ニ相見へ申候（「宝暦十四年新川郡古城跡名所旧跡等書上申帳」）

○一、猿蔵古城　舟倉村領、中段東西七間程、南北三拾三間程、上段東西五拾弐間程、南弐拾八間程、北十九間程、右渋谷筑前守殿掛持之由申伝候、年号相知不申候（「文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳」）

この内、規模・構造を詳しく記しているのは、末尾に掲げた文政元年の書上申帳である。同書上申帳に「上段」とあるのは、おそらく山頂部のA郭をさすとみて、間違いあるまい。規模的にも、数値がほぼ合致する。また、「中段」とあるのは、東側斜面に設けられた階段状の平坦面の内、cの段をさすのであろう。

ところで、この城が築かれたのは、いつ頃なのか。『三州志』によると、元亀二年（一五七一）飛騨の白屋（塩）筑前守秋貞が越中へ出兵し、栂尾・猿倉の二城を新築して拠ったという。秋貞はその後、福沢・今泉の二城を攻め落としたうえ、岩木にも別の砦を築き、城生城（現八尾町）を攻めたという。塩屋秋貞は飛騨の三木良頼の部将であるが、秋貞による猿倉築城は次の史料によって確認できる。

態以脚力申達候、仍而一昨今夜（々力）塩屋筑前守下山へ罷退、則昨夜中猿倉之地へ取登、飛州之者共引出、普請半候、従兼日世間申廻義も御座候条、塩筑貴府（越府）へ可被召下之由、何茂へ申入候へ共、拙者式申事御本ニ不被成候間、無是非存候、千言万句増山当城不運眼前ニ候、只今之分者大切ニ存候、此旨可預御心得候、恐々謹言、

（元亀二年）
卯月廿三日　　長尾小四郎
　　景直

上村庄右衛門尉殿(1)

元亀二年、上杉謙信は神保長職の要請によって越中へ出兵し、守山城（現高岡市）などを攻めようとしたが、小矢部川の増水により目的を果たせなかった。飛騨の三木良頼はすでに前年（元亀元年）、上杉氏の軍事行動の一端を担う形で新庄城や樫ノ木城などを守っており(2)、この年の軍事行動には塩屋秋貞を参陣させたのであろう。その秋貞が、下山（舟倉周辺の地域）へ退き、猿倉山で「普請」を始めたというのである。秋貞のこうした動きは、上杉方に大きな不審を抱かせるものだったらしく、長尾景直は増山城などの不安を訴えたのである。この件については、その後史料上に現われてこないので、どのような解決をみたかは不明である。しかし、この時期の飛騨勢の動向には、なかなかつかみ難いものがあり、時として、上杉方から警戒の眼で見られていたことは事実であろう。

ともかく、元亀二年における塩屋氏の猿倉築城はこの史料によって裏付けられるが、『三州志』に述べられている福沢・今泉二城の攻略などは、今のところ根拠とするものがない。ただし、宝暦十四

年の書上申帳などが塩屋氏による猿倉・栂尾両城の掛持ちを伝えているのは興味深い。おそらく両城はその近接した地理的位置から見て、一体となって使われることが多かったのだろう。なお、この年の塩屋氏による普請が、猿倉城の創築と言えるかどうかは、不明である。飛驒勢の越中進出は、江馬氏の例からもわかるように、すでに永禄年間から始まっており、この猿倉山が飛驒口の要地にあたることを考えるなら、猿倉城の創築は遅くとも永禄年間にまでさかのぼるかもしれない。

一方、塩屋氏とは別に、城主として「寺嶋三八郎」（「越中古城記」・「越州新川郡郷庄古城」）、「寺嶋平左衛門」（「富山領等越中国古城併雑書記」）、「寺嶋ミつざう坊」（「越中四郡古城跡略記」）などの名をあげる史料もある。「越州新川郡郷庄古城」によると、寺嶋三八郎はもと舟倉の法師密蔵坊の子で、兵部卿（卿）といい、神通川の城主寺嶋孫右衛門の鳥帽子子となって寺嶋三八郎と名乗り、のちに上杉の部将村田大炊介と小黒野に戦ったという。

このように寺嶋三八郎については、いろんな伝承が残されているが、その詳細はまだ明らかではない。あるいは、『三州志』に引用されている「飛驒軍記」中に見える小島三八郎のことをさすのであろうか。とすれば、この寺嶋氏は飛驒の武将ということになろう。

翌元亀三年五月になると、加賀の一揆勢が越中西部に進出し、にわかに緊張が高まった。ちょうどこの時期、船倉に拠る井上肥後が下山の者と示し合わせ、上杉方支配下の太田保内へ二度ばかり攻め込んでいる。これに対し、上杉方では、新庄城を守る鰺坂長実や長尾景直が反撃を行い、井上らを下山口まで追い込んだという(3)。井上氏の動きは一揆方に連動したものであるが、この時井上氏の拠った「船倉」とは、おそらく栂尾城をさすのであろう。そして、その井上氏が示し合わせた「下山」の者とは、この猿倉城に拠った勢力をさすとみられる。しかし、この時点で猿倉城に拠っていたのが塩屋氏であるのかどうか、今のところ明らかではない。

さて、同年六月になると、一揆勢は東進して富山を占拠し、上杉勢と対峙することになる。飛驒勢の方は、九月に江馬輝盛、また十月には三木自綱（良頼の子）が上杉陣に加わり、その軍事行動に協力している。しかし、まもなく三木良頼が没すると、あとを継いだ自綱は織田方への接近を図り、天正三年（一五七五）十月には上洛して信長に拝謁するに至った(4)。飛驒三木氏のこうした動きの結果、猿倉城などの拠点は謙信から敵視されるようになったのであろう。翌四年には、栂尾城が謙信によって攻略され、謙信は二カ所の城郭を飛驒口に築いて、能登へ向かっている。おそらく、猿倉城もこの時点で上杉方の拠点となったのであろう。「富山領等越中国古城併雑書記」が上杉部将村田修理之介を城主としてあげているのも、この頃のことであろう。

ところが、謙信は同六年（一五七八）三月に急死をとげる。そして、これによって生じた混乱に乗じ、信長が神保長住を越中に進出させ、上杉方の駆逐を図るのである。この時点で猿倉城も織田方の手に落ちたとみられる。その際、三木氏が織田方に属して働いたことは言うまでもない。こののち、佐々成政が越中に分封され、長住に代わって国内の統一をめざすようになると、国人の中には上杉景勝と結んで成政に抵抗する者が現われた。城生城の斎藤信和もその

城生城跡大手口の堀切と土橋

一人である。天正十年十一月頃の斎藤氏の動きを伝える史料を次に掲げる。

重而令啓上候、仍毎度如申上候、此表之儀就御出馬遅々追日被取詰迷惑此事に候、殊猿倉両地拙者抱置候間、菟角急度兵粮御助力被入置候而可被下候由、可然様被御申上奉頼存候、何分ニも貴所御前之儀御執成奉憑候、（中略）恐々謹言

（天正十年）十一月八日　斎二右（和）信利

（狩野新介）狩新

参御宿所(5)

この書状によると、斎藤方は景勝の出馬が遅れているため、日を追って取り詰められ、困難に陥っていること、ことに「猿倉両地」を確保しているため、必ず兵粮については援助願いたいと、強く懇請している。宛先の狩野新介（秀治）は景勝の側近である。注目されるのは「猿倉両地」である。これは、おそらく猿倉城と栂尾城の二城をさすとみられる。両城は距離的に接近し、歴史的に見ても相互に結びつきが強く、むしろ一体化していたように思われるからである。本拠である城生城とは別に、栂尾・猿倉の二城を確保することによって、斎藤氏は飛騨口を固め、成政に対し軍事上優位に立とうとしたのであろう。しかし、頼みとする景勝の出馬はなく、斎藤方は次第に追い詰められていったのである。成政が最終的に城生城を攻略するのは、天正十一年七～八月のことであり、こののち猿倉城はしばらく佐々方によって守られたとも思われる。その成政も同十三年秀吉に降伏し、同十五年には肥後へ転封となった。猿倉城の使用もその後は考えられない。

註

(1) 『県史中』一七三七号文書

(2) 同右、一七二四号文書。なお、「樫ノ木城」の項参照。

(3) 同右、一七五三～一七五四号文書

(4) 『信長公記』巻八、十月廿三日の条

(5) 「覚上公御書集」

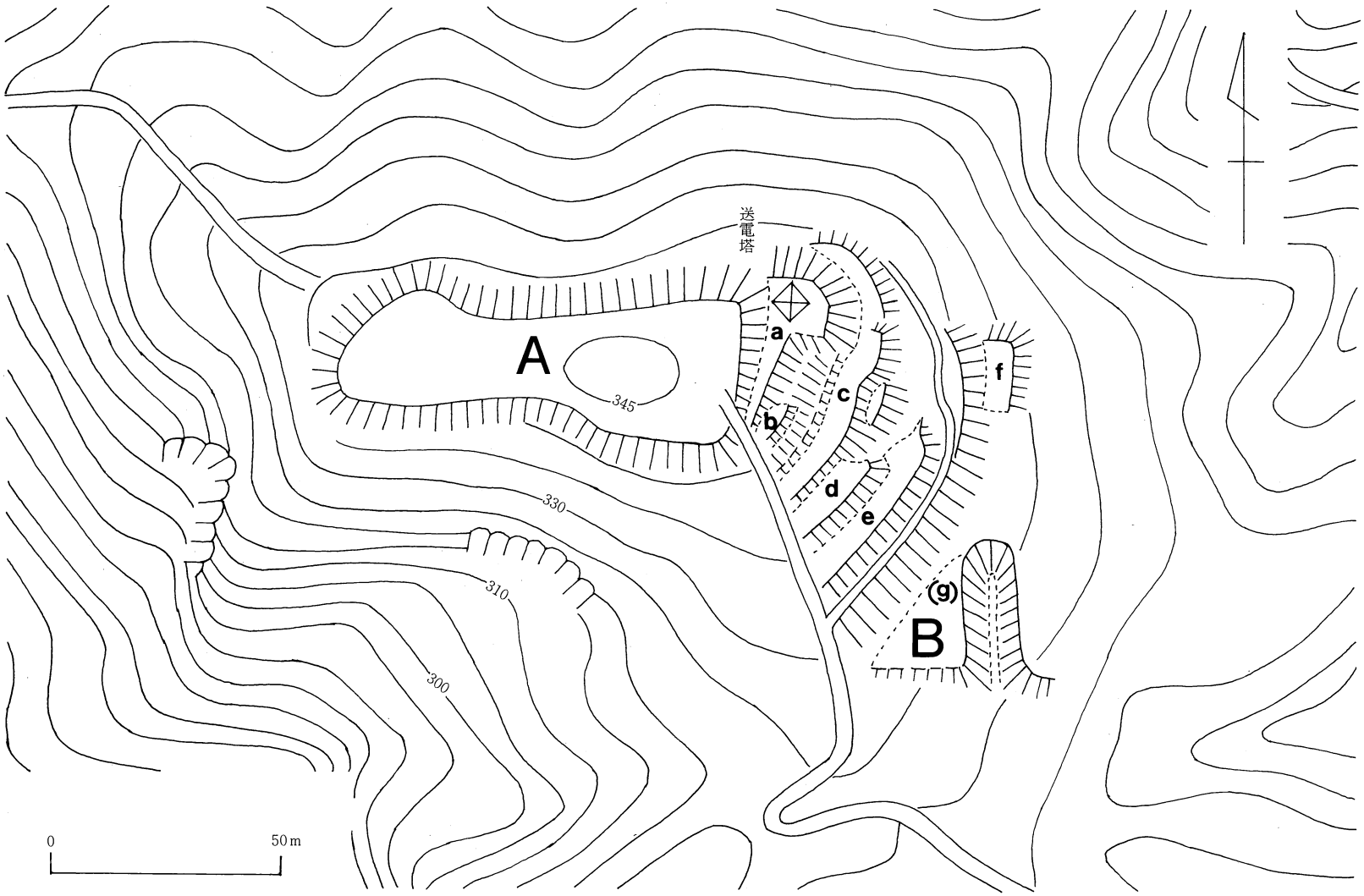


図10　猿倉城遺構概念図

三　栂尾城（とがお）

標高　二八〇m
比高　一四〇m

栂尾城は市場集落の東方にそびえる山上に築かれた城で、別名を戸川城と称した。山頂からは麓の舟倉台地、さらに遠く富山の市街地までを望める。飛騨街道のルートの一つとして、富山―布市―小黒道があるが、この道は中世にまでさかのぼる道と推測されており(1)、小黒から坂本―市場を経て神通峡に達していた。このルートはまさに栂尾城の麓を通ることから、城の築城がこの交通路の存在を意識していたことが明らかである。裏を返せば、坂本―市場を通るルートが戦国期にはすでに存在していたことになる。なお、麓の市場の村名は、城主塩屋秋貞が商才にたけ、当地に市場を開いて軍費を得ていたことに由来すると伝えられ(2)、城下集落の存在したことを推測させる。村人はこの城を「トガ城」と呼び、昔は山腹から刀の鍔や刀身が出土したという。

さて、栂尾城が築かれたのは、いつ頃であろうか。『三州志』によると、元亀二年（一五七一）飛騨の武将白屋（塩）筑前守秋貞が越中へ出兵し、栂尾・猿倉の二城を新築して拠ったという。そして、福沢・今泉の二城を攻め落とし、さらに岩木に砦を築いて城生城（現八尾町）の斎藤氏を攻めた。この時、斎藤氏は上杉氏に救援を求めたため、謙信は部将の村田修理亮と共に秋貞の拠る栂尾城を攻め、国境の西猪谷まで追撃したと伝えている。

塩屋秋貞による栂尾城の築城や上杉方との戦いについては、今のところ、直接これを裏付ける史料に欠けるが、隣の猿倉城「普請」については、（元亀二年）四月二十三日付で長尾景直が報じており、猿倉と並んで栂尾城も同じ頃に築城されたことが十分推測できる。なお塩屋氏は、飛騨の三木氏の重臣的な武将で、問題の元亀二年には越中へ進攻した上杉方の陣に加わっていたとみられている。この点は、前項でも述べたとおりである。いずれにせよ、栂尾城は戦国期の越中―飛騨間の主要交通路沿いに築かれた城であり、飛騨から北上した武将にとっては、恰好の足がかりとみなされたに違いない。同時に、そうした飛騨勢による越中南部の占拠が、城生城に拠る斎藤氏に脅威を与えたことも事実であろう。

さて、翌元亀三年になると、加賀の一揆勢が越中へ進攻し、上杉方を五福山などで打ち破って、富山城を占拠する。それより少し前の五月（一揆勢が五位庄に陣取っている頃）、舟倉に拠る井上肥後が「下山」の者と示し合せ、上杉方支配下の太田保内に攻め込んだという。次の史料は、そのことを報じる新庄城守将鯵坂長実の書状である。

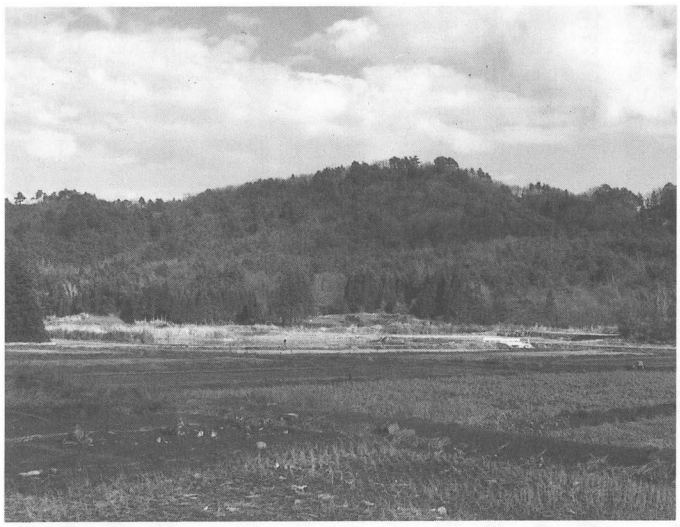
急度申達候、仍昨酉刻従火宮注進如被申者、賀州衆半途へ打出、河上五位庄ニ陣取申之由候、只今時分与申、罷出儀不審存候、併注進之書状三通、為可懸　御目越申候、御披露尤候、（中略）然而、井上肥後船倉ニ于今踞、様々之計策致之候、此間者、下山船倉示合、一両度太田保内へ相働申候得共、従当地人数出申ニ付而、敗軍之体にて罷退候、下山之口迄追籠申候、其已来二度不罷出候、井上計策者候之間、爰元休屈（窮）存候、乍去当地（新庄）太田二ケ所之寄居、用心堅固無油断致之候、可御心安候、御次茂候

者、可然様御取成奉憑候、（中略）

（元亀三年）
五月廿四日　　（鯵坂清介）
　　鯵清　長実（花押）
（直江景綱）
　　直和
（山吉豊守）
　　山孫

　参　御宿所(3)

これによると、井上肥後は二度ばかり太田保内に攻め込んでいるが、新庄城の鯵坂氏らによって撃退され、下山口まで追いこめられたという。そして、上杉方では新庄・太田二カ所の城を固めて、再度の襲撃に備えている。井上肥後らの動きは、おそらく一揆方に連動したものであろうが、この時、井上氏の拠点とした「船倉」とはどこをさすのか。「船倉」地域にはすでに知られているように、猿倉と栂尾の二城があり、互いに近接して位置する。この内、井上肥後の拠った「船倉」城とは、おそらく太田保に近いこの栂尾城であろう。また、井上氏が示し合わせた「下山」の者とは、南方の猿倉城に拠った勢力をさすのであろう。この井上氏については、出自など詳しいことは不明だが、のちに謙信が越中を制圧すると、その旗下に属したらしく、天正五年（一五七七）十二月の上杉氏の将士名簿に「井上肥後守」として名があげられている。


栂尾城跡遠望（西方より）

ところで、栂尾城は天正四年（一五七六）八～九月頃、上杉謙信に攻められ、落城をとげている。次の史料がそのことを示す。

自関東帰陣ニ付而、飛脚到来、喜悦候、関左無事之由、簡要(肝)候、
珍義(儀)も候者、註進尤候、其口人留(越後上田城)之義、皆々談合候て、堅相留
簡心候、吾分ハ案内者ニ候間、畢竟任置候、扨又爰元備存分之
侭ニ候、栂尾・増山落居、飛州口ニ地利二ケ所取立、仕置堅固
ニ成之、明日西表へ進馬候、湯山も今明之内ニ可落居候間、可
心安候、万吉重而謹言、
（天正四年）
九月八日　　（上杉）
　　謙信（花押）
　栗林次郎左衛門(政頼)尉殿(4)

これによると、謙信は九月八日以前に栂尾城と増山城（現砺波市）を攻め落とし、さらに氷見の湯山城も落城寸前に追い込んでいることがわかる。すなわち、謙信による越中の軍事的制圧はこの年にほぼ達成されたのであり、上杉勢はさらに氷見を経て能登へ進攻するのである。ともあれ、前掲の史料によって、天正四年当時、栂尾城

には反上杉方の勢力が拠っていたこと、また、上杉方が栂尾城の攻略後、飛騨口に二カ所の城砦を設けて背後を固めたあと、西方へ進撃していることなどが知られる。こうした点からみても、栂尾城は元亀～天正期に飛騨口の重要な軍事拠点とみなされていたことが理解できる。

その後、栂尾城はどのような変遷をたどったのか。『三州志』によると、一時上杉氏に属していた塩屋秋貞も天正六年（一五七八）佐々成政に降り、岩木城主となったため、上杉の部将村田縫殿助がこれを攻めて飛騨へ追い返し、栂尾城を取ったという。天正六年と言えば、三月に謙信が急死し、織田方がその混乱に乗じて、飛騨から越中へ進出した年である。織田方の先陣は、越中にゆかりの深い神保長住で、これに佐々長穐が付き添い、また飛騨の三木自綱も長住に協力した。神通川左岸にある、同じ飛騨口の要衝、城生城の斎藤氏もいちはやく織田方に属したことから、猿倉・栂尾両城の上杉方拠点は、長住の入国と同時に攻略され、以後、織田方によって固められたものであろう。

しかし、天正十年（一五八二）になると、飛騨口はまたしても風雲急を告げる。前年、越中へ分封された佐々成政に対して、城生城の斎藤信和が敵対し、対岸の猿倉・栂尾両城にも兵を入れて固めたからである。斎藤氏はこの時、上杉景勝に兵粮などの援助を求めたが、救援は得られぬまま、ついに翌十一年の包囲によって城生城は落城をとげたのであった。なお『三州志』は成政が「越中守護」だった時、佐々与左衛門成之が城を守ったとも伝えている。佐々与左衛門は成政の有力部将の一人として知られ、天正十一年（一五八三）には城生城の斎藤氏攻めに加わり、同年八月、婦負郡南部を中心に一万俵の知行を与えられている(5)。これは城生城陥落に伴う戦後処理であったとみられ、与左衛門は引き続き、城生城を守ったと伝えられる。このように、城生城や栂尾城の守将としての伝承を残すところからみて、与左衛門は佐々氏領国下にあって、越中南部、特に飛騨口の守りを任せられていた部将と推測できる。

ただ、与左衛門が栂尾城を守った時期は今一つはっきりしない。『三州志』故墟考には、「或は云ふ、成政越中守護たる時佐々与左衛門成之これを守ると。」と記すのみであり、時期が漠然としている。この点については、三つの時期が考えられる。まず第一は、成政が城生城を攻略し、越中全域を支配下に置いた天正十一年から同十三年までの時期である。この時期の終わりは、言うまでもなく、成政が秀吉に降伏した十三年の八月である。第二は、成政降伏後の十三年から肥後転封（十五年）までの時期、そして第三はこれら二つの時期を合わせた時期、すなわち十一年から十五年にかけての時期である。この内、三番目は、栂尾城自体がそのような長期にわたり、成政の有力部将の拠点になったとは考え難いことから、まず除外してよい。残る二つの内、一番目だとすれば、与左衛門は城生・栂尾両城を掛持する形になり、東西で飛騨街道を押さえていたことになる。また、二番目だとすれば、成政降伏後、新川一郡だけに削減された領国内にあって、前田氏領となった婦負郡域と神通川をはさんで向き合う形となる。

この内、与左衛門が拠点とした時期について可能性が高いのは、二番目の時期（天正十三～十五年）ではないかと考えられる。成政

の降伏後、佐々方は神通川を境に前田領と接することになり、栂尾城の重要性が高まったとみられるからである。特に、それまで与左衛門が拠点とした神通川西岸の城生城は前田方の拠点となり、青山佐渡が置かれた(6)。この結果、城生城に対峙する拠点として、また国境を守る境目の城として栂尾城が利用されたことは、想像するに難くない。しかも、富山から南下する飛騨街道が西方を通過していることを考え合わせると、栂尾城は新川郡の佐々領内にあって、その西南部を守る要衝であったと言ってよい。

佐々与左衛門がこの時期に栂尾城を拠点として利用していたことを別に裏付けるものとして、次の史料がある。

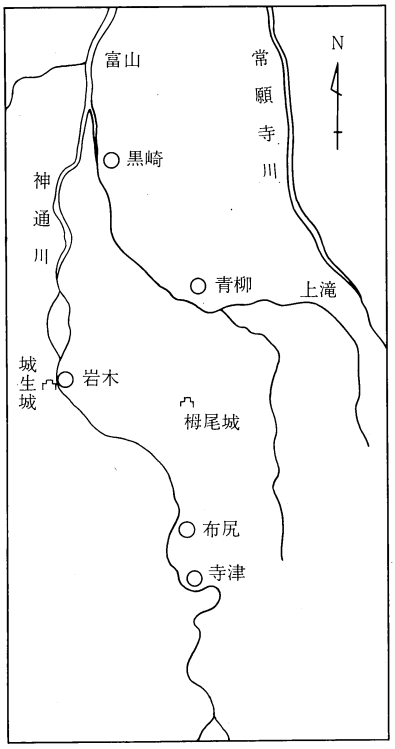


図11　佐々与左衛門宛の知行方目録に見える村落

知行方

一　九百五拾七俵七升者　　黒崎
一　八拾四俵者　　寺すむら（津村）
一　弐百拾三俵者　　のゝしり（布尻）
一　弐千七百六拾弐俵者　　青柳
一　拾三俵弐斗者　　岩木

合四千俵者

天正拾三　　（朱書）「佐々成政」
閏八月十三日　　（印）

与左衛門尉殿(7)

これは、成政の降伏により新川一郡が秀吉によって安堵された直後、成政が与左衛門に対し新たに与えた知行方目録である。この二年前、城生城攻略後に与えられた知行が一万俵であったのに比べ、十分の四に削減されているが、これは成政領国の縮小に伴う、やむを得ぬものであったろう。それはともかく、この知行方目録に見える村落の内、寺津・布尻・岩木は神通川の東岸に位置し、いずれも婦負郡（前田領）との境界線沿いにある（図11参照）。特に岩木は、古く塩屋氏が城生城攻めの際、砦を築いた所として伝えられるなど、対岸の城生城と対峙する位置にある。また、寺津や布尻は飛騨街道（神通川東岸道）沿いの村落である。こうした点を考えると、与左衛門への知行宛行が飛騨口（南）と前田領（西）に対する備えを意図したものであることが読み取れよう。すなわち、前掲の知行方目録から見て、与左衛門が栂尾城を拠点としたのは、天正十三～十五年の間の時期であった可能性が高いのである。なお、成政は天正十五年に肥後へ移るが、与左衛門もこれに従い、越中を去っている。

このののち、栂尾城が使われた形跡はない。

余談ではあるが、与左衛門は肥後で起きた国一揆の際、一揆方と

戦い討死をとげている(8)。

では、次に栂尾城の規模や構造などについて記した史料をいくつか掲げてみよう。

○戸川　又作栂尾・外川・栂野等。又船倉郷に在るを似て船倉城とも呼ぶ。自富城四里、自猿倉十五・六町あり。猿倉城をも船倉城と呼ぶは、是も亦船倉村領にあれば也。戸川今存する遺迹十間に三十間余。夫れより北に方十間余の地あり。此の山三方深壑、西麓に市場村あり。

元亀二年白屋秋貞越中へ出張、此の城に保み、福沢城を攻取り、又今泉城を陥れ、後岩木に附堡して城生城時に斎藤次郎右衛門居之。を囲む。因りて城主次郎右衛門援を謙信に乞ふ。謙信出軍し、秋貞降る。天正六年又成政に降り岩木城主となるを、村田縫殿助飛州へ追ひ返し、戸川城を取ると云ふ。或は云ふ、成政越中守護たる時佐々与左衛門成之これを守ると。(『三州志』故墟考)

○戸川城　栂尾城とも云ふ。市場村東、山城にて穴あり。四五町横へ道あり。中に蝙蝠多く、山下、蔵・屋敷跡あり。市場村下、北に連なり屋敷跡多く、この辺を掘れば骸骨出づる。(『肯搆泉達録』)

○一、舟倉村領戸川古城者、先年飛驒国錦山之城主鍋山休庵様御家臣、渋谷筑前守様御居城之由申伝候、年号等相知不申、当時柴山ニ相成居申候(「文化十三年古城跡并館跡由来承伝之趣書上申帳」)

○一、壱ケ所　古城跡

但舟倉村領之内戸川与申古城跡御座候、此城主渋谷筑前守殿与申伝候、年号者永禄年中之由及承申候、村ゟ古城跡迄道程拾丁程、村方ゟ東之方ニ相見へ申候(「宝暦十四年新川郡古城跡名所旧跡等書上申帳」)

○一、戸川城跡　舟倉村領、中段南北拾五間程、東西九間程、上段西口三拾弐間程、南拾間程、北弐拾壱間程、先年飛驒国錦山之城主鍋山休庵殿御家臣渋谷筑前守殿御居城之由申伝候、年号相知不申、当時者柴山ニ相成居申候(「文政元年城跡館跡由来申伝之趣書上申帳」)

○一、舟倉東ノ山城ハ先年戸川等在城セシカ、飛州江引込ニ付テ村田此所ヲ守ル由(「越州新川郡郷庄古城」)

○一、舟倉　山城　富山ゟ南、飛州ノ方之山口ニ而御座候、近辺高山近ク御座候、飛州之内ヲ知行仕候塩谷賢物在城之由、謙信之旗下之由ニ御座候(「越中四郡古城跡略記」)

○戸加尾　村田左衛門(「加賀国越中国能登国古城跡」)

○一、船倉村古館跡

塩谷筑前守居住之由(「越中古城記」)

○一、船倉村戸川之城者佐々与左衛門殿入城也、筑前守殿簇下之由（「富山領等越中国古城併雑書記」）

続いて城の縄張を見てみよう。図12は、平成二年三月十日の調査をもとに作成したものである。これによると、城の遺構は東西約一五〇m、南北約三六〇mにわたっており、この中に九カ所の郭と三カ所の堀切を認めることができる。城域はかなり広大で、郭の数も多いことから、山城としては規模が大きいと言える。また、周囲も深い谷がめぐっており、地形的にも要害である。

郭は、標高二八〇mの山頂部から主として北西に向けて伸びる尾根伝いに、階段状に連続して設けられている。この内、山頂のA郭は南北に細長く伸びており、南半部は特に真ん中が高くなった馬の背状を呈する。このため、平坦面としては、北半部の狭い所しか見当たらず、城全体の中心的な郭とは言い難い。どちらかと言えば、物見用の郭であろうか。規模は三〇×五四mである。なお、A郭から北東に向けて伸びた細尾根の中腹に穴があり、あるいは前掲の『肯搆泉達録』に記された「山城にて穴あり」にあたるのかも知れない。この細尾根の先端部から北側一段下に別の細尾根が伸びており、その先端部から急斜面を下った所に浅い堀切の形跡（No.3）がある。おそらく、ここから北へ向けて伸びた尾根伝いに備えたものであろう。

さて、A郭から北西に一段下った所にB郭（一二×一八m）がある。この郭の東側から北側にかけて高さ一m余りの土塁がめぐっている。郭の北側から西に斜面を下ると、中腹に九・四×一二mの広さで平坦地が設けてある（G郭）。これはB郭から南西に向けて張り出した小尾根に備えたものとみられる。

一方、B郭の北側は約一〇mの段差を伴う急斜面となって、下のC郭に続く。この段差は城内最大のものであり、B郭の守りの固さを物語る。こうした点からすると、B郭は小規模ながら主郭として位置づけられるように思われる。C郭の規模は一三・五×二〇・五mで、B郭同様、東側から北側にかけて土塁がめぐらされている。この土塁の高さは、最も高い南端部で郭内から一・三m程度を測る。

C郭の北側一段下には、二〇×二九mと城内で最も広いD郭がある。ここは郭上の削平も十分に行われており、城内でも主要な施設の置かれた郭とみられる。郭の北東隅からは小さな尾根が張り出しているが、ここには小削平地が四段にわたって設けてあり、この小尾根から城内に攻め込まれるのを防いでいる。また、D郭から北西へは一段低く平坦地（八×六・八m）があり、その先は西側を削り落として細尾根にしている。これは北方の尾根伝いから一気に攻め込まれるのを防ぐためのものであろう。この細尾根の先端は急な斜面となり、その先に東側を通路状に削った尾根が三三mにわたって続く。

尾根から一段下ると、七・四×六mの小平地があり、さらに一段下った所に一三×二八・五mの郭（E郭）が見られる。この郭の東・西・南側には土を盛り上げた土塁状の高まりも認められる。また、郭の南側には浅いくぼみもあるが、あまりにも浅いため、堀切の遺構とは言い難い。E郭の先、一段下にはF郭が続く。規模は八・八

堀切（No.２）を北側より見る

堀切（No.１）を北側より見る

×一七・六ｍで、東西両側と北側に低い土塁状の高まりが見られる。郭の北側はだらだらと下る尾根となって、北方へ続いており、城域もここで画される。

次にA郭の南方を見てみよう。A郭の南方、一段下には腰郭状の平坦地（H郭）が設けられている。この郭は、A郭から南方と西方に伸びる尾根続きに備えたものである。規模は三〇×一四ｍ程度である。H郭から西方に対しては一段低く小平坦地があり、さらにその下に一五・五×九ｍのI郭が設けられている。この郭は二段になっており、東側が高い。また、その上段の南側のへりに土塁状の高まりが見られる。

一方、H郭から南方へ続く尾根筋を下ると、途中の二カ所に堀切が設けられている。まず北側の堀切（No.２）の方は上幅八・五ｍ、深さ二・一ｍを測る。また南側の堀切（No.１）は上幅七ｍ、深さ二・二ｍを測り、これら二カ所の堀切によって、城は南方の尾根伝いから守られている。城域の南端もこの内の堀切（No.１）によって画される。

――以上、遺構の概要を見てきたが、総じて城は郭の配置から北方を重視して築かれていることがわかる。また、北端のF郭から山頂のA郭に至るまで、その間大小八段もの段差を乗り越えねばならず、この尾根伝いの攻撃は容易ではなかったと思われる。これに対し、南方の防御がやや弱いのは築城者が飛騨の武将だったためであろうか。いずれにせよ、このように比較的大きな縄張を持っていたことが、天正四年の上杉勢による攻略をもたらし、さらには佐々与左衛門の拠点としても利用された理由であろう。

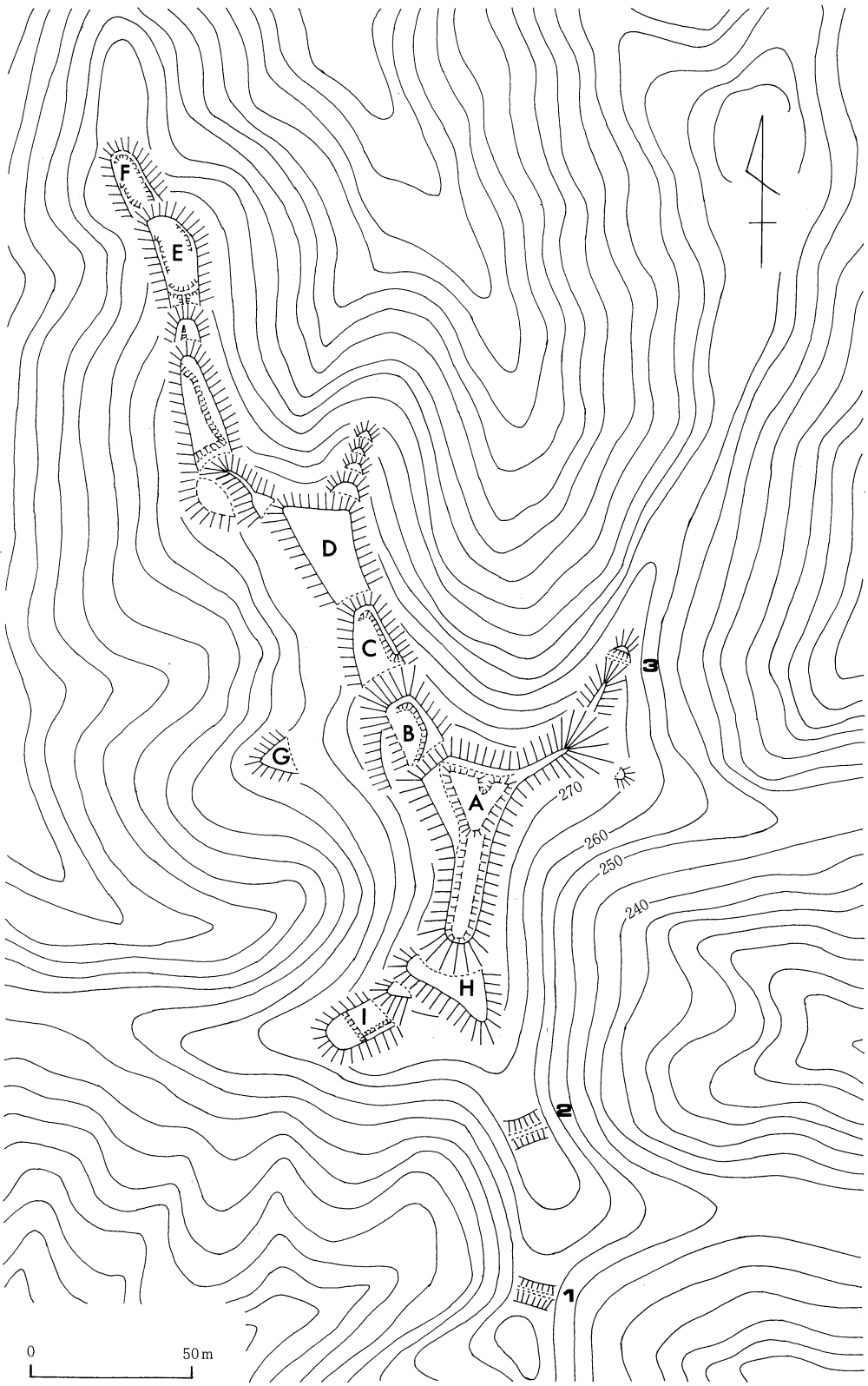


図12　栂尾城遺構概念図

註

(1)『富山県歴史の道調査報告書――飛騨街道――』
(2)『角川日本地名大辞典』16
(3)『県史中』一七五三号文書
(4)同右、一八五九号文書
(5)『県史近』八三号文書
(6)『三州志』故墟考、「城生」の項
(7)『県史近』一三四号文書
(8)『肥後国誌』

上新川地域の中世城館とその性格

このたびの調査では、大山町の西側に隣接する大沢野町域についても、足を伸ばしてその実態把握につとめることとした。これは、神通川以東に位置する二つの町が、戦国期にはともに南側で飛騨と境を接し、常にその飛騨との関わりの中で歴史が展開されたからである。ここでは、大山・大沢野両町を上新川地域として一体的に捉え、その中で存在した中世城館をいくつかの角度からながめ、それらの性格を考えてみたい。

○分布・立地状況

富山県内には約二百カ所余りの中世城館が存在したが、上新川地域にはその内十二カ所が分布する。これは富山県全体の約六%にあたる。また、当地域の場合、ほとんどが山地に築かれており、平地に築かれているのは大沢野町の岩木砦一カ所(ただし、段丘のへり)にすぎない。

城館の立地は、交通路や生産地域と深い関わりがあるが、とりわけ当地域においては、交通路との関わりが顕著である。図13は城館分布図に飛騨街道などの道筋を書き込んだものである。これを見ていくと、ほとんどの城館が何らかの道筋に沿って分布することがわかる。これら山間部を縫う道筋の内、主要な道は三本ある。一つは神通峡谷の右岸をたどるもの(飛騨街道東道)、また一つは津毛から黒川の谷筋を抜け、檜峠を越えるもの、さらにもう一つは、中地山付近から高所の尾根伝いに有峰を経て飛騨に至るもの(うれ往来)である。この内、最初の飛騨街道東道沿いには栂尾・猿倉の二城、

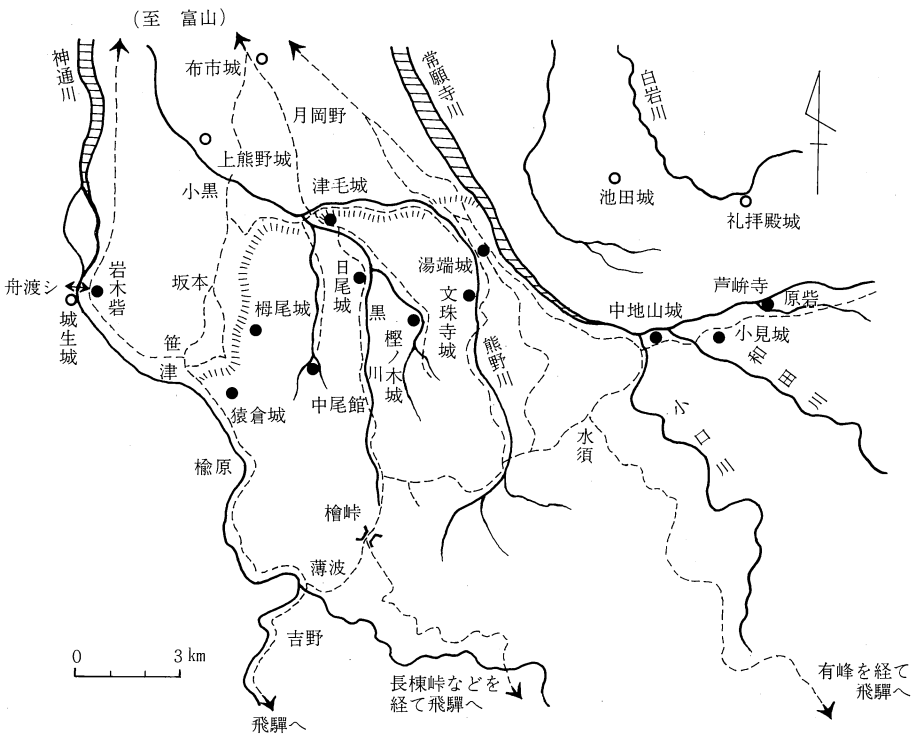


図13　上新川地域の城館と交通路

(註)道筋は天保10年の新川郡略絵図などにより記入。

また黒川谷の道沿いには津毛・日尾の二城、うれ往来沿いには中地山城が存在する。これらの道筋はすべて飛騨へ通じるものであることから、当地域の城館が主として越中～飛騨間の交通路を深く意識する形で築かれていることが知られる。言いかえれば、飛騨との関係を抜きにして、当地域の城館は語れないことになる。

○存立期間

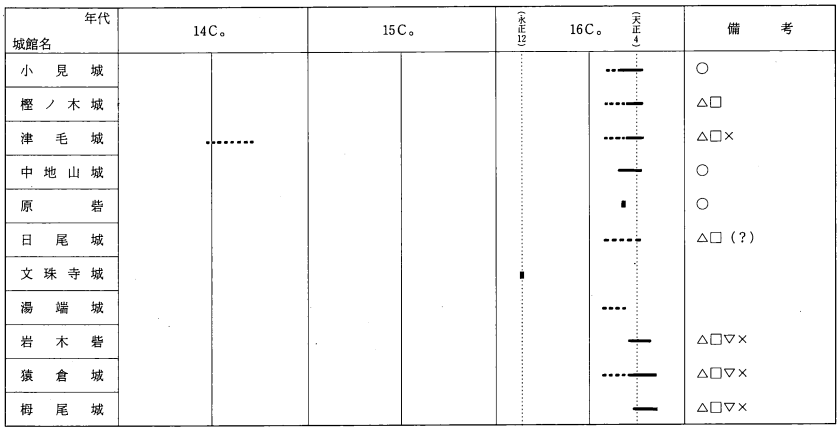


図14　上新川地域の城館と存立期間

(註) 1. 時期が一切不明の中尾館は除外した。
2. 14世紀（南北朝期）の津毛城については、桃井直常の守護在職の始期から越中での在国を確認できる最後の年までを一応の存立期間として推測した。（康永3～応安4年）
3. 備考欄には、戦国末に各城館がどのような勢力に属していたかを大まかに表示した。（ただし、時間的な変遷を示すものではない。）○…江馬氏関係　△…塩屋（三木）氏関係　□…村田（上杉）氏関係　▽…城生斎藤氏関係　×…織田（神保長住、佐々）氏関係
4. 塩屋（三木）氏関係の城館は、天正元～4年に上杉氏の支城となった。（上杉氏は、天正4年に栂尾城を攻略し、上新川の西部地域を制圧している。）

次に各城館の存立期間について見てみよう。現在残されている史料は、極めて断片的なものであり、これをもとに直ちに存立の時期を推測することは危険だが、遺構や縄張の状況、さらには伝承（江戸時代の書上申帳などによる）などを検討することにより、ある程度の幅を持たせて作成したのが図14である。無論、これはあくまでも、一つの試みとして作成したものである。

同図によれば、大半の城館が永禄年間以降、天正年間にかけての十六世紀後半に存立期が集中する。これは各城館の項でも述べてきたように、この時期、飛騨の武将達が当地域に進出し、拠点を構築したことによる。たとえば、江馬氏は永禄七年頃、中地山に築城し、三木氏は元亀元年に樫ノ木城を上杉氏の軍役として守っている。また、三木氏の部将塩屋秋貞は同二年、猿倉・栂尾城を拠点化している。こうした飛騨武将の進出と拠点の構築が上杉氏の越中での軍事行動に呼応し、その一端を担うものであったことは言うまでもない。

なお、当地域に進出した三木・江馬両氏の勢力境界線は、城館の伝承その他からみて、おおむね現在の熊野川のラインで東西に分かれ、東が江馬氏、西が三木（塩屋）氏の勢力下にあったようである。

しかし、これら飛騨武将による城郭の維持は安定したものではなく、飛騨国内の政治情勢の変化によって常に流動化する不安定な要因をはらんでいた。東部の江馬氏については、ほぼ一貫して親上杉の立場をとっていたが、西の三木（塩屋）氏の場合、その動きは微妙であり、元亀三年三木良頼が没すると、あとを継いだ自綱は織田氏に傾倒するなど、その行動は上杉氏にとって信頼し難いものであった。このため、天正元年以降、津毛城など上新川西部の城には村田氏などの上杉部将が入って、直接城を固めたとみられる。こうした上杉勢の西部地域進駐は、最終的には天正四年の栂尾城攻略をもって完了したと思われる。

しかし、同六年になると、事態は一変する。この年、越中を支配していた上杉謙信が急死すると、その混乱と動揺に乗ずる形で織田方が飛騨から越中へ進出したからである。先陣の神保長住が入国したのは四月で、九月には津毛城が織田方の手に落ちている。おそらく東の江馬氏拠点、中地山城も同じ頃に攻略されたとみられる。とすれば、上新川地域の城館は同年中にすべて織田方の勢力下に入ったことになる。

当地域の城郭の内いくつかは、その後しばらく織田方の拠点として使われる。それは織田方が富山城を固める同八年頃まで続いたであろう。同十年～十一年には、城生城の斎藤氏が佐々成政に敵対し、栂尾・猿倉城を拠点化して戦う。この斎藤氏攻めの際には、岩木砦が佐々方の向城（付城）として使われたとみられる。同十一年の城生城陥落後、当地域においては猿倉城と栂尾城が飛騨口に備える佐々方の拠点となるが、二城の内、中心となったのは規模からみて、栂尾城の方であろう。しかし、成政の降伏（同十三年）から肥後転封（同十五年）によって、これらの城も使用に終止符が打たれる。その後、当地域を領有した前田氏が城郭を使用したという形跡はない。むしろ前田氏は婦負郡側の城生城を重視し、ここに守将を配置したのであった。

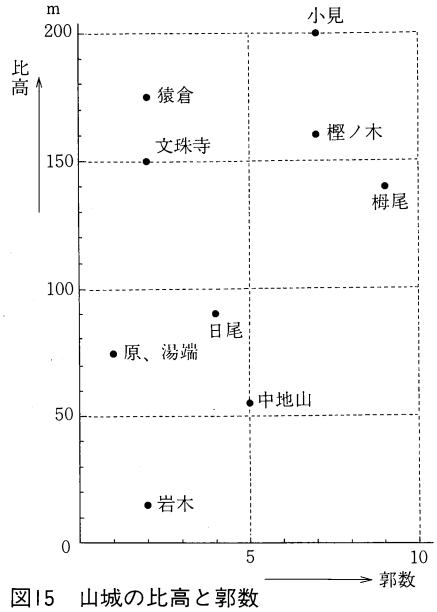


図15　山城の比高と郭数

（註）1．構造が不明確な津毛城、中尾館は記入していない。
2．岩木砦は山城ではないが、参考までに記入した。

○山城の性格

図15は、各山城の比高と郭の数の関係を見たものである。一般に比高が大きい高所に位置する山城は、地形的に要害としての性格が強く、また郭の数が多いほど城郭としての規模や居住性が大きくなる。同図によると、一〇〇m以上の比高を有するのは、小見・栂尾・樫ノ木・文珠寺・猿倉の五カ所で、これらは要害としての性格が強い。中でも、猿倉・文珠寺の二カ所は郭数が少なく、規模が小さいことから、居住性よりも要害性が重視されていると言える。これに対し、樫ノ木・栂尾の二城は比較的高所にありながら郭数が多く、規模・要害度ともにバランスがとれており、当地域の中でも中心的な城郭だったことをうかがわせる。これに対し、比高二〇〇mという最も高所に位置する小見は、郭数が多いものの、その比高から要害度が高く、むしろ万一の際の詰城としての性格が強い。なお、中地山は郭数が五カ所と規模はやや大きいが、比高が五五mと小さいのが注目される。これは要害性よりも居住性を重視していることを示し、より日常的な中心拠点としての性格を浮かび上がらせている。この点は、江馬氏の中地山城に対する築城意図を示すものとして、興味深い。

おわりに

昭和五十四年の踏査から十年余りを経て、今回、本書に各城館の縄張図や遺構の細かな解説を盛り込むことができ、ようやく一区切りつけたという思いで一杯である。ここ十年余りの間に、中世史の研究は大きな変貌をとげた。何よりも考古学上の成果が相次いでもたらされ、これまで文献史料の上でしかたどることのできなかった中世という時代が、発掘された遺構や出土品などによって、実にいきいきと我々の前に姿を現わしてきたからである。それとともに、研究の視点にもかつてない多様さが求められるようになった。

城館研究についても、この十年余りの間に研究者が全国的に増大し、各地で活発な交流やシンポジウムが行われるようになった。こうした一連の流れを背景として、城館は今や中世史研究にとって不可欠の分野と認識されるに至った。城館がこのように位置づけられたのは、何よりもそれが地域に根ざした遺跡として、今も広く人々の目に触れることのできる場に存在するからである。

特に、本県のように文献史料の乏しい所では、村や町など小地域の中世史を明らかにする上で、城館調査は欠かせない。寺や神社の境内、そして裏山にひっそりと残る城館跡を自分の足で歩いて、見て、その規模や構造を丹念に追っていく。それは石造物の調査と同様、地道な仕事である。しかし、これからの中世史研究は、このような足をかけた実地調査によってこそ、新しい視点を開くことができると思われる。一つ一つの城館が、その村や町の中でどのような形で存在し、地域とどのように関わっていたのか。こうした点を明らかにしていくことで、これまで文献史料だけでは果たせなかった小地域の中世史像が、より鮮明なものとして浮かび上がるはずである。

しかし、実地踏査は現実にはつらく、きつい仕事である。特に大山町のように大半が山間部で占められ、奥地の過疎化が進んでいる地域ではなおさらである。ある時は、城跡の柿の木に熊の真新しい爪跡をそこかしこに見つけ、調査員一同、背筋に冷たいものを感じたこともあった。このことは、村落の無人化に伴って、城山に登る道が消え、そこがすでに熊などの活動領域に入っていることをまざまざと示していた。あるいは、これも「時」の流れであろうか。

しかし、山の中には実に見事な城郭遺構が、まだまだ数多く残ることが今回の調査によって明らかとなった。特に樫ノ木城は戦国末期の山城の中でも、計画性に富んだ縄張を残す城として特筆され、湯端城も方形の居館プランをとどめる遺構として、いずれも貴重である。また、小見城では大規模な堀切が今も残り、中地山城では長大な空堀や郭の跡がはっきりと認められる。今後は、こうした中世の城館跡を地域の歴史を語る史跡として、大切に保存・整備し、後世に伝えていくことが我々に課せられた責務であろう。

最後になったが、今回の調査にあたり、次の方々に実測作業その他で大変お世話になった。記して深く感謝の意を表したい。

○前田英雄　久々忠義　津田憲一　山下　隆
土肥静夫　梅沢昭俊　深川忠彦　丸山　勉
渡辺雅一　森沢　勇　柳原直明

○〔中地山〕
山崎藤太郎　中山　賢　川上信一　大村善一郎
山崎昭信　川上己之助　榎　幸治　中村武男
岩木幸一　岩木国光　岩木幸男　中島勝成
土田秀男　中島　宏　中村雅弘　中山清作

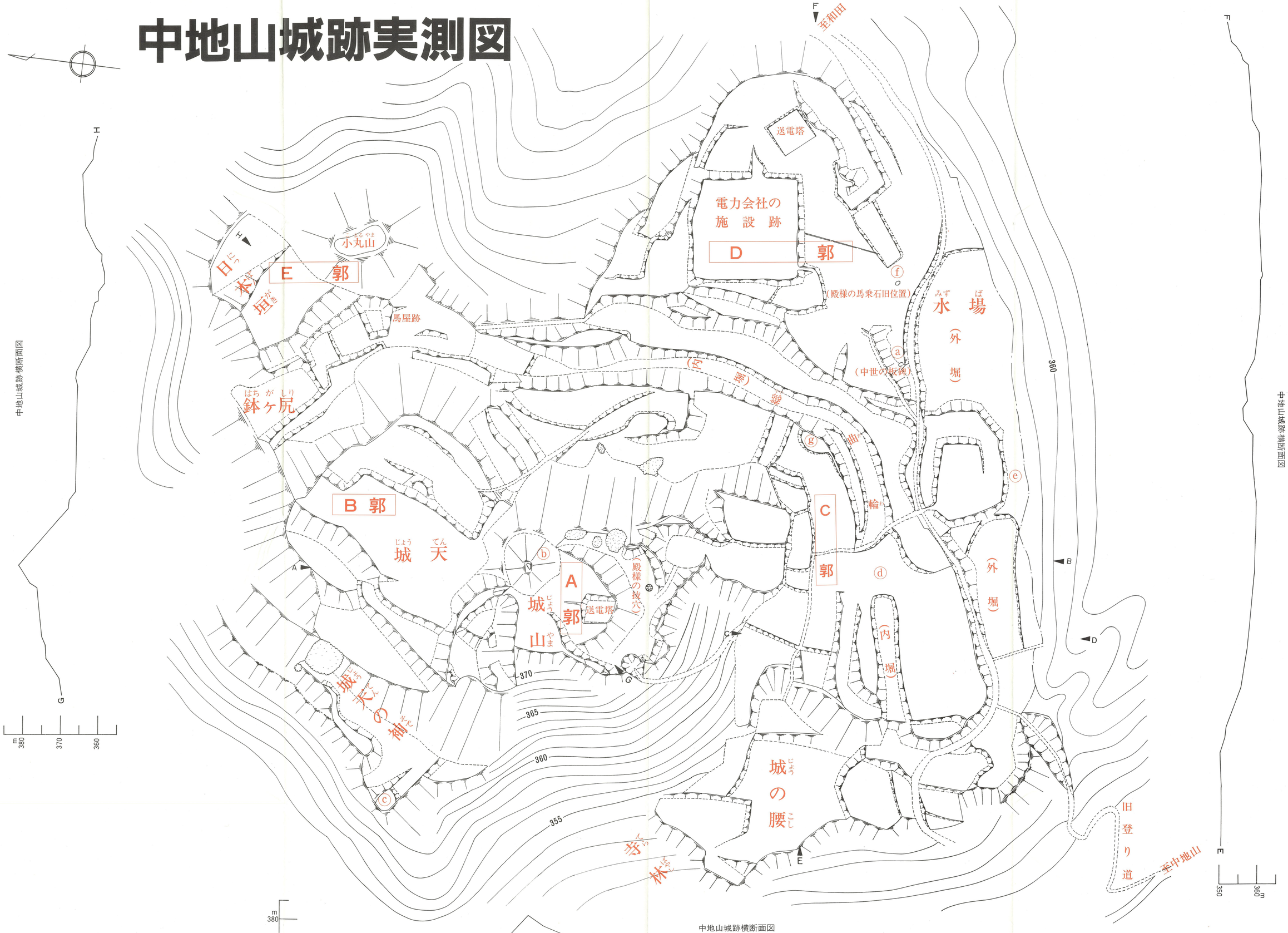
○〔小見〕
橋森一郎　野川耕作　椙本精一

○〔とやま歴史的環境づくり研究会〕
中田昌志　針原美貴代　山﨑啓昭　椙原孝志
竹澤雅彦　田村祥一　沓掛隆信　河原　久
中井　誠　老松邦雄

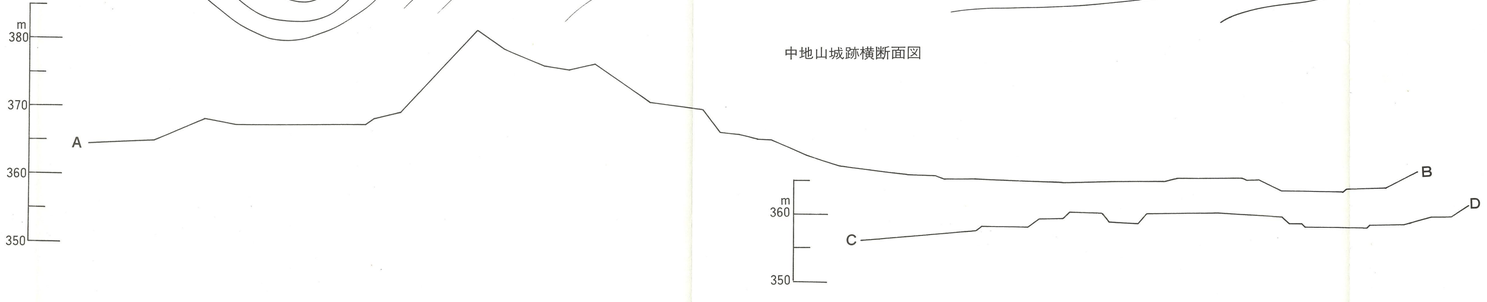
○〔大山町役場〕
高井　誠　浅野貴和　坂井美穂子

（順不同・敬称略）

中地山城跡実測図



中地山城跡横断面図



1：500

0 10 20 30 40 50m

平成２年２月作成

高岡　徹・久々忠義・浅野貴和測量

富山県大山町中世城館調査報告書

平成二年三月三十一日発行

執筆・編集　高岡　徹

発　行　大山町教育委員会
富山県上新川郡大山町上滝五二三
電話（〇七六四）八三―一二一一

印　刷　株式会社　チューエツ
富山市上赤江町二―八―六